
～碎牙～

無泰斗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

く 碎牙 く

【Nコード】

N 8 4 4 4 Y

【作者名】

無泰斗

【あらすじ】

魔法と冒険の時代、大国アトモスにある「王立第一魔法学園」でとある少年と少女の再会から物語は動き出す。

人物紹介（前書き）

人物紹介です。随時更新予定
本編で語られないキャラ設定もあります。
ただし、ネタバレ注意

人物紹介

●ゼノ・アルフレイン

物語の主人公

髪の毛…灰色

瞳の色…青

適正属性…無し

《杖》の種類…素手

十歳のときに両親が失踪したため、伯父であるジンに引き取られた。それ以来クローゼ村でそれなりに幸せに過ごしてきた。

幼少時代に周りからいじめを受けていたため、他人を貶める人間が大嫌い。

五年間伯父やその知り合いに散々シゴかれたため運動能力はかなり高い

●サンドラ・ルミール

ヒロイン

髪の毛…赤

瞳の色…黒

適正属性…水、樹、雷

《杖》の種類…長杖

ゼノの幼なじみで彼と再会を誓った女の子
幼い頃から魔法を使うことができたために、当時は周りの子供達に避けられていた。

成績優秀で、さらに美人で性格も良いため、友人関係は良好。三種類の適正属性をもつ。

学園では「紅嵐」と呼ばれている。

●ジン・アルフレイン

ゼノの伯父

髪の毛…茶色

瞳の色…青

適正属性…火、水

《杖》の種類…カッタス

ゼノの育ての親的存在元冒険者で剣術と攻撃魔法が得意、現在はクローゼ村で狩人をしている。

「おじさん」と呼ばれるのが嫌い。たとえば甥っ子にあたるゼノに伯父さんと呼ばれるのも嫌。ちなみに39歳……おじさんじゃん親と村に捨てられたゼノを引き取ったが、それ以来娘がゼノにベツタリなのが悩み

●ミリア・アルフレイン

ゼノの義妹？

髪の毛…茶色

瞳の色…翠

適正属性…水

《杖》の種類…鉈（薪割り用）

ジンの娘、始めてゼノと会ったときに一目惚れしたらしい。ちなみに当時7歳。もちろんゼノは気付いて無いが……。父親譲りの剣術と母親譲りの治癒術の才能を持っている。

義妹となっているが正確にはいここ。

●ミランダ・アルフレイン

ジンの奥さん

髪の毛…水色

瞳の色…翠

適正属性…水、樹

《杖》の種類…短杖

誰にでも優しく料理も出来る美人な万能奥様。ただし、話題が年齢に関するものになると修羅と化す。

村に来たばかりで傷心していたゼノが最初に心を開いた人でもある。ただし、ゼノに自分のことを母さんと呼ばせるのに一年以上かかった。

●村長

クローゼ村の村長

以上！！

●スズカ・イスルギ

学園の先輩

髪の毛…黒

瞳の色…黒

適正属性…火

《杖》の種類…鉄扇子

東の最果てにある大和出身。とにかくテンションが高い。中等部の2年から第一魔法学園に編入した。一年ほど前から北地区にある喫茶店でバイトをしている。

世話好きで優しい性分だが、テンションの高さのせいで台無しになっている。

カワイイものにめがない。ちなみに一つ下の学年に妹がいる。

●シムジウ・ハング

ギザ野郎改め噛ませ犬

適正属性…火、風

《杖》の種類…ロングソード

自分の嫌いな人物を思い出してみよう。それが彼の外見だ!!
ちなみに名前を逆から読むと……

●ナズナ・イスルギ

サラのルームメイト髪の毛…黒

瞳の色…黒

適正属性…地

《杖》の種類…短杖

東国の大和出身。中等部の2年の時に学園に編入してきた。ルームメイトのサラとは親友同士。

ハイテンション過ぎる姉と、何時くるか解らない親友のボケが悩みの種

●オルディン・ラグナー

杖職人

髪の毛…茶色

瞳の色…茶色

適正属性…樹、地

《杖》の種類…槌

「オルディンの武器屋」の店主。鉄製でも木製でも彼にかかれば最高の一品が出来上がる。ただし気に入った相手以外には、店に並んでる地味な商品しか売ってくれない。よく店の扉を一部の学生に破壊されるのが悩み。ちなみに62歳、まだまだ現役。

●マルク・マグリット

ゼノのルームメイト

髪の毛…金

瞳の色…碧

適正属性…火、水

《杖》の種類…拳銃

アトモスの隣の聖皇公国出身。運の無さには定評がある。

彼のルームメイトであるゼノは突然ボケをかますため気苦労が絶えない。

適正属性は2つあるが、魔力の総量が少ないため強力な魔法は使えない。また同じ理由で中等部に入学できなかった。

普段は控え目だが、いざとなると頼りになる。

●マオ・フェイ

クラスの担任

髪の毛…黒

瞳の色…黒

適正属性…雷、樹

《杖》の種類…グローブ

高等部1-Dの担任、32歳独身 東国の清出身。

よく授業をサボって合コンに行く………何でクビにならないんだろうこの人……

●ゲイリー・ブリッツ

隣のクラスの担任

髪の毛…青

瞳の色…茶色

適正属性…火、地

《杖》の種類…ナイフ

隣のEクラスの担任、よくマオの尻拭いをさせられる可哀想な先生
髪の色が青なのに水属性がないことを微妙に気にしてる
キレると叫ぶ

●トレア・ホン

副会長

髪の色…

瞳の色…

適正属性…土、樹、火

《杖》の種類…魔導書

第一魔法学園の生徒会副会長。仕事の処理能力もさることながら、
実技でも好成績を誇る。

生徒会では珍しく編入組への差別意識が無い、そのため編入組の
生徒からは男女問わず人気がある。

実はかなりの腐女子でゼノに言った三つ目の噂は彼女の願望であ
る。

●ロラン・ニルバニア

元パーティーメンバー

髪の色…黄土色

瞳の色…黄

適正属性…土

《杖》の種類…バスターソード

元冒険者パーティー『トライオーガ』のリーダー。二つ名は『剣
角』、学年上位の実力と学園下位の知力を併せ持つ。頭より先に身
体が動くタイプ。

師匠に連れられて、北の最果てであるクローゼ村でゼノと知り
合った。

● シグマ・ラゲイル

元パーティーメンバーその2

髪の毛…紫

瞳の色…青

適正属性…雷

《杖》の種類… 槍

元冒険者パーティー『トライオーガ』のメンバー。師匠に連れられ以下略。

ゼノ曰く、規則馬鹿又は陰険クソ眼鏡。規則違反には厳しいが敬語はほとんど使わない。

昔の二つ名である『雷爪』はパーティー結成時にロランに無理矢理つけられた。

世界観（前書き）

本当はストーリーの中で説明する予定だったけど作者の能力不足により挫折しました。

べ、別に泣いてなんかいないんだからね！……ごめんなさい！石を投げないでくださーイタっ！ちよ、まっ！！

世界観

（大陸）

この物語の舞台は一つの大陸であり、大陸には大きく分けて四つの地域がある。

大陸の東部

様々な小国が密集している。大和、清もその一つでありそれらの総称を『東国』という

大陸の中部

大陸で一番大きな国である『大国アトモス』の領地。殆どが草原や森林地帯で、村や町は点在しているだけであり人口密度はそうでもない。

王都アトランドでは日々魔法の研究が行われており、『魔動車』や『ゲート』はそれらの成果である。

大陸の西部

アトモスに次ぐ国土を誇る宗教国家『聖皇公国』がある。

この国では魔動技術は神への冒瀆と考えられている。そのため移動の際は魔動車ではなく馬車である。

：それにしても名前適当にし過ぎた気がする：

大陸の北部

三国の北側に大陸を横断する様に連なる『バベル山脈』によって人が立ち入ることができず未だ未開となっている。また、その近海も大型魔物の巣窟となっているため海路も不可能となっている。

人間の活動領域は大陸のほんの一部ではないかと考えられている。

く魔法く

魔力

生物が持っている生命エネルギー。魔法の発動には不可欠で、こめる魔力が多ければそれに比例して強力な魔法を使う事ができる。また、身体や物に魔力を循環させることで魔法を使わなくても僅かに対象を強化することもできる。ただし効率が物凄く悪い。魔力は集めすぎると身体に悪影響を及ぼす。例えば火の魔力を集めたら細胞が焼け焦げる、というぐあいである。

《杖》

前述の通り強力な魔法を扱うためには相応の魔力が必要になる、しかし集めすぎると身体がボロボロになってしまう。そこで魔法を使うための魔力の受け皿の役目を果たするのが《杖》である。魔術師は《杖》に溜め込んだ自らの魔力を用いて魔法を使用している。

呪文

魔法を発動させる為の大事な工程で、呪文を詠唱することで魔力を変換して魔法を発動することができる。また、呪文は人によって様々であり、同じ『火球』の魔法でも人によって詠唱が違う。ただし、初級魔法程度なら魔法名を言うだけで発動できる。

く冒険者く

冒険者とは主に魔物の討伐や物資の採取を仕事としている魔術師のことである。

冒険者ギルド

冒険者を支援する『国境の無い冒険者組織』であり、大陸中に支部が存在している。

近隣の住民から依頼を受けて、その仲介料や様々な国からの支援で成り立っている。

冒険者の仕事

既に記したように討伐と採取が殆どだが、他に商人などの護衛や手紙の配達も存在する。

そして冒険者の究極の目標が未開の開拓である。その為、各国はギルドへの支援が義務付けられている。

（魔物）

古より世界に存在する生物。

一口に魔物と言っても様々な種族が存在しており、中には人に近い生態の魔物も存在する。

魔物の活動領域は主に暗闇の多い深い森林や洞窟である。そのため草原等には魔物は発生しない、たたし夜になるとその限りではない。そのため人間が遠くへ移動する時は日が沈む前に終えなくてはならない。

魔物と動物の違いは、動物と違って魔物は暗闇から、発生、することである。つまり夜に出歩く事は魔物の巣を徘徊することに等しいのである。

（居住地）

人間が暮らすには夜でも魔物に襲われる事の無い環境が必要になる。そこで、人間はこの世界で魔物が唯一立ち入る事が出来ない場所である、気穴、に村や町を造っている。

気穴

この世界には地中に「気脈」と言われるエネルギーの経路が存在しており、その経路が地上に噴き出す地点を「気穴」という。高位の地属性魔法の使い手ならば一時的に気穴を造り出す事ができる。そのため野営をする際は彼等の協力が必要である。

冒険者のいう開拓とはこの気穴を探しだす作業に他なら無い。現在最もバベル山脈の近くにある気穴は、北の最果てと言われている『クローゼ村』である。

プロローグ

「本当に行っちゃうの？」

少女は泣きそうな眼で目の前の少年にたずねた。

「仕方ないよ、俺みたいな役立たずを引き取ってくれる人なんて他にいないからね……」

少年は少し困った顔をしながらそう答えた。

「違うよ！ゼノは役立たずなんかじゃない！村の皆がゼノの良さを理解してないだけだよ！」

「俺の良さ？そんなの存在しないよ、頭も悪いし魔法の才能も無いし、それに何より……」

少年――ゼノは俯きながら呟いた

「あんな最低な親達の息子何だから……」

「！……でもそれはゼノのせいなんかじゃ……」

ゼノの両親はつい先日、ある事件を起こして失踪した。

……たった一人、十歳になったばかりのゼノを残して

「それに村の皆が言ってるよ、『お前みたいな落ちこぼれが村に居座ること自体間違いだ』って」

ゼノには魔法の才能が無かった、それどころか、ひとりに最低一つはあるはずの魔法の『適正属性』すら無いため村の同年代の子供達

からいじめを受けていた、また、彼の両親は息子にほとんど興味を示さず彼とまともに会話を交わすことすら無かった。

ただ一人、目の前の幼なじみだけが彼の唯一の味方だった。

「でもゼノが居なくなったら、わたし…」少女は涙を流しながら力無く呟いた

「大丈夫だよ!……サラならきっと俺がいなくてもやっていけるから。」

「でも!」

「サラには魔法の才能がある。だからきっと、他の皆ともすぐに仲良くなれる。……もう俺を庇う必要も無くなるしね。」

ゼノは、俯いて泣いている少女――サラに微笑んだ

「俺さ、向こうに行ったらおじさんに剣術を習ってみることにしたんだ。」

「?」

「だから約束するよ!次に会うまでに絶対に強い剣士に成るからさ、楽しみにしててよ!…ね?」

「グス………わかった。でももう1つ約束して…」

サラは涙を拭いながら言った

「絶対に…絶対にいつかわたしに会いに来て。」

ゼノは笑顔でそれに頷いた。

「小僧、そろそろ時間だ。」 「…はい、わかりました。 それじゃ またねサラ…」

「またねゼノ…」
ゼノはサラと最後に微笑みながら別れの挨拶を交わし、魔動車に乗り込んだ

「挨拶はすんだか？」
運転席で男が尋ねた
「うん」

「じゃあ行くぞ」

走り去っていく魔動車をサラはいつまでも眺めていた

「ねえおじさん 「おじさんじゃねえ！ お兄さんだ！」 ……………ゴメン。
お兄さん」
「なんだ？」

「向こうには何日ぐらいに着くの？」
「…だいたい三日ぐらいだ。」

「そっか、遠いね…」

「だからよお、いつまでもそんなひでえ顔されたらこっちが参っちまうからよ、いまのうちに泣いておけ。」

「!……グス、うわああああああ!!!!」

ゼノの悲鳴のような泣き声が草原に響き渡った。

1話 五年後（前書き）

初投稿の作品なので、へたくそな文ですがよろしくお願いします。

1話 五年後

side..ゼノ

「うん…。」

朝か、なんだか懐かしい夢を見た気がする。故郷の「ハング村」を旅立ったときの夢か…

もうあの日から五年も経過したのか、はやいもんだ、あれっきり幼なじみのサンドラとは一度も会ってない。

「まあ、俺のことなんてもう忘れているかもな…。」

それに気まずいんだよなあ、あのときの約束破っちゃったし

「ゼノ…！朝ご飯できたからそろそろ起きなさい」

下から母さんの声が聞こえた、そろそろ起きよう

リビングにおりたら見知った茶髪の男性が声をかけてきた

「おう！起きたかゼノ」

「おはようおじ「ああん！」…父さん」

この人は「ジン・アルフレイン」五年前に俺を唯一引き取ってくれた人で、恩人であり育ての親でありそして、師匠でもある

ちなみに俺を捨てた父親の弟だから俺の伯父なんだけど「おじさん」と呼ぶとさっきみたいにキレル……今年で39歳のくせに

「まったく、最初からそう呼べばいいんだよ」

「ははは…」

「おはようゼノ」

キッチンから女性の声が聞こえる

「おはよう母さん」

この人は「ミランダ・アルフレイン」ジンの奥さんで俺の育ての親。よそ者の俺を快く受け入れてくれた頭が上がない人の一人だ。

「まったく、オレのことは今だにおじさんのくせにミランダには母さんかよ」

「いや、でも父さんって呼ぶとたまに怒るじゃん」

「オレが？んなこたあない。だからちゃんと父さんと呼べ。」

よくいうよ…まあいいや早く席につこう。と思ったら小さめの影が背後から突貫してきた。

「おはよう！ゼノにい！」

「グボア」

やべ、変な声でた…

「おはよう…、朝から元気だねミリア」

この少女の名前は「ミリア・アルフレイン」元々この家の娘で今年で12歳、五年前俺がこの家に引き取られて以来俺のこと兄としてってくれている

俺にとっては可愛い妹だ。…元気すぎるけどな、まあいいけど

「えーと、ところでミリア…」

「なあ…に？」

「そろそろ離れ「いや！」…いやそう言わすに」

！！ 前方から凄まじい殺気が！

「おい小僧、齒あ食いしばれ。」

「いや、あのと、父さん？」

「誰が！『義父』さんだ！」

「ちよっ！さっき自分で呼べって！！」

「問答無よ「ゴス！」」ドサッ

「さあご飯にするわよ♪ミリア、そろそろお兄ちゃんを離してあげなさい。」

「はぁ…いい♪」

母さんの手には角に血糊が付いたまな板がぶらさがってた…まあいいけど…

「それにしても二人共今日から王都に行っちゃうのか……寂しくなるわね。」

「うん…、俺も今回ようやく編入試験に受かったからね。」

そうだった、今日から王都にある魔法を学ぶための学校「王立第一魔法学園」に通うために王都に旅立つんだった。

魔法とは、体内に眠る魔力を用いて発動することができる術のことで魔術ともいう

そして魔力とは、生物が持っている生命エネルギーのことで、これが多いほど強力な魔法が使いやすいのである。ちなみに魔力の総量は修行することによって増加させることが出来る

閑話休題

もちろん魔法の才能が乏しい俺にも魔力は存在するため、簡単な魔法なら使うことができる。はずだ。

ちなみに試験には今までに3回落ちました…

「そういえば学年はどうなるの？まさかふたりとも同じ学年？」

「違うよお母さん、あたしが中等部の一年生でゼノにいが高等部の一年生だから別々だよ。……残念ながらね」

「? 最後ボソボソと何か言ったか？」

「べ、ベツになんにも！」

あきらかに怪しいな…。まあいいけど

「あらそうなの。でもいきなり高等部から大丈夫なのゼノ？」

「心配いらないよ。むしろ高等部から受けに来る人だっているぐらいだし。」

「まあそれにオレが五年間も鍛えてやったしな♪ガッハッハ！」
と父さんが笑いながら続けた

ていうか父さん…いつの間にリカバリーしたんだ？

「でもゼノには勉強できないからあたし心配だなあ…。」

いや妹よ、ハッキリと言い過ぎじゃね

ていうか妹に勉強の心配されるって……………まあべつに…いやよくないか。

「まあ勉強できないのは認めるけどその分は実践科目で補うよ。」

「でもゼノには魔法も苦手じゃん！」

…なんだろう、妹は俺のことが嫌いなんだろうか？

「こちら、ミリアそのくらいに下さい。お兄ちゃんが困ってるでしょう。」と母さんが割って入ってきた

ていうか母さん、あなたが心配とか言い出したのが原因なんだけど…。

俺は軽いため息を吐きながら荷物をまとめて部屋に戻った。

1話 五年後（後書き）

ご意見、ご感想をお待ちしています。

2話 第二の故郷（前書き）

学園までまだまだかかりそうです。

2話 第二の故郷

ここは「クローゼ村」、周りを樹海に囲まれた「大国アトモス」にある古びた村である。

その村の入口にたくさんの方々が集まっていた。

「それじゃあゼノ、気をつけて行ってくるんじゃよ。」

「はい、村長！」

「ところで、ミリアは何処にいるのかの？」

この老人はクローゼ村の村長、村人皆に好かれているおじいちゃんである。

「ミリアならそこで友達と話してるよ。」

と、ゼノが指を指した方では、ミリアが同年代の女友達に囲まれ別れの挨拶を交わしていた。

「ゼノ君！王都に行ったら気をつけるんだよ！知らない人について行ってはいけないからね！」

「うん、ありがとうお兄さん」

「オッス！ゼノ、お前がいなくなると狩りが忙しくなっちゃまいな。」

「うん、ゴメンおっちゃん」

「ハッハッハ！！そんな気にすんな！それにしてもたった五年であの『どへたれゼノ』がこんなに立派になりやがるとはなあ。」

「こら、あんた邪魔だよ！！さっさとどきな！！！！ゼノ、つらい事があっても挫けるんじゃないよ。それからミリアちゃんのことをしっかり守るんだよ！」

「わかりました、おばさん。…それからもう少しおじさんに優しくしてあげてね。」

（本当にこの村の人はいい人ばかりだ！

よそ者の自分をあたたかく迎え入れてくれただけじゃなくこんなに別れをの言葉をかけてくれるんだから。）

「そろそろ出発します。準備をしてください。」
と学園行き魔動車の運転手が告げた。

ちなみに「魔動車」とは、百年ほど前に馬車に代わる交通方法として発明された魔力で動く馬要らずの馬車である。利点として、交通速度なら馬車よりも格段に速く、さらに馬の休憩も必要としないすぐれものである。

ただし、重い物を運ぶことはできないため、行商人などはいまだに馬車を使用している。

ここクローゼ村にも魔動車はあるが、学園行きの魔動車は王都で開発された最新型なので、村のそれとは比べ物にならない性能なのである。

ちなみにクローゼ村のような王都から遠くの村や町にいる生徒にはこのように王都から迎えがくるのである。

閑話休題

「それじゃ、ミリア行こう!!」

「うん!」

「ゼノ、ミリア、体に気をつけるのよ?」

「まあアレだ!二人共楽しんでこい!」

「は〜い♪」

「はい。」

ゼノとミリアはミランダとジンにそう返した。

「それじゃ行ってきます!」

こうして二人を乗せた魔動車は王都を目指して出発した。ゼノ

の第二の故郷をあとにして…

「ところで、わしらは名前すら紹介なしなのかのう…？」

……………こうしてゼノは第二の故郷を旅立った。

3話 魔動車にて(前書き)

ようやく適正属性についての説明が書けました。

3話 魔動車にて

Side…ミリア

あたし達がクローゼ村を出発してから4日目。

いつも日が沈む前に近くの町で宿をとっているから、夕方の僅かな時間だけけど、あたしは3日間ゼノにいと一緒に町を探険したり、お店をまわったりして過ごしていた。

その間ゼノにいと腕を組んで歩きまわった。あたしにとってはちょっとしたデート気分だった。

そういえば、途中ですれ違う人達がたまに、ゼノにいのことを見て小声で「ロリコン」って言ってたけど、どういう意味なんだろう？聞こえる度にゼノにいは「兄妹です！！」って叫んでいたけど…。

それから、泊まった宿は三つ共すつつつつごく大きな宿だった。運転手さんに聞いてみたら「魔法学園に遠くから通いに来る生徒のために、学園側が事前に予約をとっているんですよ。」って言った。

そんな感じで王都までの道のりを過ごしていたんだけど…

「なあ運転手さん。」

「なんでしようかゼノ君。」

「王都には後どれくらいで着くんのだ？」

「またですか…。そうですね、おおよそ3時間ぐらいで着きますよ。」

「ううう！退屈過ぎる…。」

今日は朝からゼノにはこんな感じで落ち着きがない。最初の頃は魔動車の窓から景色を見てハシャイでいたのに…。どうやら4日目の最終日に飽きたらしい。

「もう、うるさいよゼノにうう！」

「ゴメン、でもこうヒマだとどうにも。」

「どうせなら教科書読んで予習してなよ。」

そう言いながら、あたしはカバンから教科書を取り出して、ゼノに差し出した。

「こんな難しいもの読めねえよ…。」

いやゼノにい、いちおうこれ中等部用だよお…。

あたしは仕方なく自分で教科書を読む事にした。

~~~~~

「解説！！はじめての魔法学♪」

魔法とは、体内に眠る魔力を用いて意図的に引き起こすことの出  
来る奇跡である。

誰にでもそれぞれが得意とする属性が存在する。この属性のこ  
とを『適正属性』という。

## 第一章

### 第一節 適正属性

適正属性とは、簡単に言うとな魔術師個人に最も適した属性のこ  
とをいう。ここで忘れてはいけないのは「適正属性以外の属性も、  
簡単な魔法なら使用することが出来る」ということである。日常生  
活で使われている魔法の多くは、誰にでも使うことが出来る。

つまり、魔術師は適正属性の魔法しか極めることは出来ないが、  
ある程度なら他の属性も使うことが出来るのである。

### 第二節 属性の種類

魔法の属性は大きく分けると5種類ある。

#### 「火属性」

主に火を扱う属性であり、細かく分けると、熱と炎などが  
分類される。

#### 「水属性」 主に水を扱う属性であり、氷や霧、そして怪我を治す治

癒魔法などが分類される。

「樹属性」

主に自然に関係する属性であり、風や樹、そして毒魔法やそれを治す医療魔法などが分類される。

「雷属性」

主に電気を扱う属性であり、雷や磁力などが分類される。

「地属性」

主に物質に関係属性であり、地や鉄、そして錬金術などが分類される。

以上の5種類が五大属性と呼ばれる、魔法の基本である。

~~~~~

そこまで読んであはしは本を閉じた。

「うーん、やっぱり魔動車の中じゃあ集中して読めないや。…あれ？ゼノにいい？」

「……………ZZZ！」

……………いつの間に寝てる。

「ふぁゝあ、あたしも眠くなってきた。」

今内にゼノにいの膝枕で寝よっ♪

side out

ゼノ達の4日間の旅もついに終わりが見えてきた。

「ほら、二人とも起きてください。」

「ンア…？あれ、どうしたの運転手さん？」

ゼノは眼を擦りながら眠そうに運転手に聞き返した

「ほら見てください。あれが王都の名物のひとつ大城壁ですよ。」

「？？……！！！！お、おいミリア起きろ、見てみるよ！」

「もう、なんなのゼノにい…？！」

二人の目の前には高さ20メートルにも及ぶ、巨大な城壁がそびえ立っていた。

「すごい！！横幅もものすごい長い！！」

「きゃー！すごい！すごい！すごい！」

「王都全体を囲んでいますからね。ちなみにゼノ君が住んでいたクローゼ村が軽く100個は入りますよ。」

「ええええ！！そんなに広いんですか？！」

「もちろん！王都内には学園以外に、もたくさんの施設や住民の居住区、そして宮殿がありますからね。」

「そうか、そういえば王都なんだから宮殿があって当たり前か…。いや、でもさすがに100個って……。」

「まあ、クローゼ村はあまり大きな村では無いですからね。とてもあたたかみのある優しい村ですが……。」

と、運転手は続けた

ゼノは少し照れながら笑った。

「すごい！すごい！すごい！すごい！すごい！すごい！すごい！すごい！すごい！すごい！」

「おーい！ミリアー！そろそろ落ち着こうな…。」

しっかりしてるようでもミリアはまだ12歳の少女なので、始めての王都にハシャイでいた。………まだ外壁なのに。

――――

そうこうしているうちに、魔動車は城壁にあるひとつの巨大な門の前にたどり着いた。

「はい、じゃあ次の方どうぞ。」

鎧に身を包んでぶしょうヒゲを生やした門番が気だるそうに告げた。

「やあビス！調子はどうだい？」

運転手が親しげに門番に問いかけた。

「よお、誰かと思ったらマルコじゃねえか！ってことは乗っているのは学生さんかい？」

門番のビスはやはり親しげに運転手のマルコに返した。

………ちなみに、ここまで頑なに「運転手さん」で通してきたが、そろそろ扱いずらくなってきたため諦めて名前を付けた。

閑話休題

「ああ、だから手続きのほうを頼むよ。」

「任せとけ!…よし、そんなボウズそれから嬢ちゃん、入学証明を見せてくれねえか?」

門番のビスはゼノとミリアに問いかけた。

「ハイ。えっと…あつた!これでいいですか?」

「おうバッチリだ!そんなじゃ…ほら、こいつが許可証だ!」

そう言って、ビスはミリアに腕輪を差し出した。

「次からこいつを見せてるだけで門を自由にくぐれるからな。くれぐれも無くすなよ。」

「ハイ!…ところでゼノに何してるの?」

ミリアが問いかけると…

「……ヤバイ、入学証明忘れて来た……。」

と真っ青な顔でゼノが答えた。

「ちよっ!どうするのゼノにい!入学式明後日だからもう間に合わないよ!」

「ヤバイ！マジでどうしよう！このままじゃ父さんにシバき倒される！…いや待てよ、今回ばかりは母さんまで参戦してくるかも！」

「いやいや、心配する所が違うんじゃないかな？」

マルコが苦笑しながらつつこんだ。

「落ち着けボウズ。アレだ、身分を証明出来るもんがありやあなんとかなる。」

「本当ですか！！ってかホントに！！」

「ああ、毎年オメエみたいな奴が必ずいるからな。此方も救済措置ぐらい用意してる。」

ゼノは急いでカバンを漁ると中から一枚の金属製のカードを取り出した。

「じゃあこれで！！」

「だから落ち着けて…。おお、『ギルドカード』じゃねえか。」

ギルドカードとは、冒険者がギルドに所属していることを証明するカードで、個人の名前やレベルが記載されている。

ギルドやレベルについての説明はまたいずれ。

閑話休題

「ボウズ冒険者だったのか？どれどれ………！！！！」

「…あ、あの…何か問題でもありましたか？」

ゼノが恐る恐るきいてみると

「——い、いや大丈夫だ！えっと名前は『ゼノ・アルフレイン』だな、えーと……お！ちゃんと名簿に名前が乗っているな」

「そんじゃあ…ホレ、ボウズの分だ。ところで……」

ビスは腕輪を渡しながらゼノに問いかけた。

「学園に通っていた訳じゃねえのに、なんでギルドに冒険者登録してたんだ？」

「べつに大した理由じゃないですよ。故郷がド田舎にあるから、冬の間はそれぐらいしか稼ぐ方法が無いんですよ。あと修行も兼ねて…ていうか学園とギルドって何か関係あるんですか？」

「ああ！授業の一環としてギルドでクエストを受けてるからな。もつとも、高等部からだが。」

「さてと、ボウズその腕輪絶っっ対に無くすなよ！」

「うっ、わかりました……」

こうして一行を乗せた魔動車は門をくぐっていき、ようやく王都への旅に終わりを告げた。

走り去っていく魔動車をビスは眺めていた。

「あの灰色の髪の毛にあのギルドカード、……あれが噂の『牙折り』か。」

門番の呟きは風に流されて空に消えていった。

3話 魔動車にて（後書き）

王都到着。……………何時になったらヒロイン出てくるんだろう。

4話 王都到着

ゼノとミリアは、運転手のマルコに別れを告げ、学園を目指して歩いていたが――

「それにしても……スゴいね。」

「ああ、ものすごい広いな。……で、ここは何処だろう？」
――さっそく道に迷っていた。

ここ「王都アトランド」は、大国アトモスの南部にあるこの国最大の都市である。

都市内は北、南、東、西、そして中央の五つの地区で成り立っている。

ちなみに第一魔法学園が在るのは西である。

ゼノ達は、北の城門から王都入りしたため、現在北地区にいるのだが

「えっと、向こう側が西地区のはずなんだけど……建物に邪魔で進めないし」

彼等がいる北地区は、商人や冒険者がよく訪れるため、あらゆる店や宿が密集しており、迷宮と化していた。

ちなみに冒険者ギルドもここ北地区に居を構えている。

「ゼノにい…お腹すいた…」

「そういえば、昼飯はまだだったか？
しょうがない、その食堂でメシにしよう。」

ゼノは近くに在った、少し大きめのキレイな食堂を指差したて言った。

— — — — —

カランコロン♪

「いらっしやいませ！何名様ですか？」

店に入ると同時に、ポニーテールの女の店員が笑顔で訪ねてきた。

「え、えーと に、二名です…「ただいまカウンター席しか空いて
ませんがよろしいですか！」

「ハ、ハイ「それではこちらの席へどうぞ!!」…」

二人は店員の勢いにおされながらもあとに続いた。

「いらっしやいませ。ご注文が決まったらこちらへお声をおかけください。」

カウンター席に座ると、正面からダンディな男の店員が声をかけてきた。

「すみません、その前に少し聞きたいことがあるんですが良いですか？」

「ええ、かまいませんよ。」

ダンディな男は洪い声で答えた。

「えっと、第一魔法学園に行きたいんですけど道に迷ってしまつて……。よろしければ道をききたいのですが……。」

「なるほど。王都に来たのは初めてですか？それなら「あれ！君達魔法学園の生徒なの！？」」

ゼノとダンディが会話をしていると、先ほどの店員が勢いよく割り込んできた。

「ええ。先ほど王都に到着したので学園に報告に行こうと思っていて……。あなたも第一魔法学園の生徒なんですか？」

「もちろん！ 明後日から高等部の2年になるのよ！」

ゼノの問いに店員は元気に答えた。

「それならスズカさん、もう少しで今日のバイトは終わりですし、彼等を学園まで案内してあげてはどうですか？」

ダンディはエエ声芸人並の渋い声色でそう提案した。

「そんな！ さすがにもうしわ「それはいい考えね！そうしましう！」け…な…い？」

スズカと呼ばれた店員は即断した。

「いえ、でも「いけない！注文が入ったんだっ！ それじゃまた後で！！」…いっちゃったよ。」

「お腹すいた…。」

さっきからまったく会話に参加してなかったミリアが呟いた。

— — — — —

「「ごちそうさまでした！！」」

「それではお会計は合計1000Gゴールドです。」

ゼノは財布から500と書かれた金貨を二枚取り出した。

「それでは、ちょうど1000Gいただきます。ありがとうございます
いました。またのご来店をお待ちしております「さあ！それじゃ行き
ましょう！！ お疲れさまでしたバイトリーダー！！」…お疲れさ

までしたスズカさん。」

「言わせてあげよう!! あと一文字ぐらい言わせてあげよう!!」

ゼノは腹の底から声を張上げてツツコミをいれた。

「…あのおじさん、バイトだったんだ…。」

ミリアはボソツと呟いた。

5話 学園まで（前書き）

ようやく学園に着きます

5話 学園まで

side…ゼノ

食堂を出てから俺達は、北地区の『ゲート』に向かっていた。

そもそもクローゼ村の100倍以上の広さの王都を、歩いてまわるのは無理があるそうだ。……冷静に考えればたしかにそうだ。

そこで都市を行き来するために用いられるのが、「魔術式転移門」通称『ゲート』だそうだ。

「ゲートは大昔に存在したと言われている『時空間魔法』の研究中に偶然実用化に成功したという、王都が誇る大規模魔法陣なのよ！」

と、さつきスズカさんに質問してもいないのに説明された。

しかもドヤ顔で……けっこうイラっときた。

「ゲートはそれぞれの地区に3つあって、それを使って都市内それぞれの地区に行くことが出来るのよ!!」

と、ドヤ顔のまま続けてきた。

どうでもいいけど毎回あんな大声をだして疲れないんだろうか？

そして現在――

「ほら！あそこの店が雑貨屋でそっちの店が防具店よ！！ あ、心配しなくても西地区に行けばもっと可愛いお店もあるからね！！今度いっしょに行こうねミリアちゃん！！」

「あの…その…あうう…」

——妹が、ものっそい勢いで絡まれてます。

どうしてこうなったんだっけ……？

く回想中く

「それじゃ！まずは自己紹介から！私はスズカ！スズカ・イスルギよ！出身は東国の大和！《杖》はこの扇子！それから——」

と、やはりこっちが何か喋る前に、一方的に情報をぶちこんできた。

「——で！趣味は——！あと——は——で！そういえば最近——」

「もう大丈夫です！！！」

「そう？ まあ私だけが話しててもしょうがないもんね！」

すでに十分過ぎるぐらいにしゃべくり倒してんだろが……！！

と内心思っていたけど

「ええ、そうですね。」

この時まったく態度に出さなかった自分を誉めてあげたい。

「ゼノ・アルフレインといいます。 明後日から高等部の1年になります。」

「じゃあ私の方がお姉さんなんだ！ 『スズカお姉さん』 って呼んでね！！」

「いえ、さすがにあれなので遠慮させていただきます。」

「そ、そう……。」

あれ？ ちよつとへこんでる？

「まあ、そこはこれから話し合っていけばいいか……。」

そこは諦めてくれ！

「えっと、じゃあスズカ先輩で。」

「先輩？ そっか先輩か……それもいいわね！！ これからは私のことをスズカ先輩と呼んでいいからね！」

復活しやがった……。 まあいいけど……。

「それじゃ早く続きを聞かせて！」

止めたのはあなたです。

「そうですね……出身はアトモスのずっと北の方にあるクローゼ村

です。えっと……以上です。」

「えゝそれだけ！？もっと趣味とか教えて！ね♪」

ね♪と言われても…

「――ちょっとあなた、いい加減にしてください！！ さっきから
ゼノにいつきまとして！何なんですか！？」

「こらミリア、そんなに怒らなくてもいいだろう…。」

妹よ、よく言った！

「うっ、 うん…ごめんなさい…」

ミリアはしょんぼりして謝った。

「！！――か、かかか…」

あれ？どうし「カワイイ〜！！」
なにこの娘！スツゴクカワイイ
！！」

「「え？」」

「お名前は！？」

「ミ、ミリア・アルフレインです――」
「今何歳！？」

「えっと、12歳で――」

「じゃあ中等部の1年生になるんだ！！」

「あの、はい…。」

「私のことは『スズカねえ』または『ねえね』って呼んで!!」

「それはちよつと……」

「好きな食べ物は!?! それから――」

〽回想終了〽

〽side out〽

何故かミリアのしょんぼりした姿と、その前のゼノ「にい」という言い方がツボだったらしい。

「いいこと思いついた! 今度私の部屋に遊びにおいでよ!! ミリアちゃんに似合いそうなカワイイ服がいっぱいあるから!!」

「そういえば先輩、ゲートって始めてなんですけど、どんな感じですか?」

さすがにミリアが心配になり助け船をだすゼノ

「え! そうね…それは見てのお楽しみかな! もうすぐ着くから楽しみにしててね♪さあ行きましょう!」

なんとか救出に成功したようだ。

「……ミリア、今度から人前では兄さんと呼ぼうな?」

「わかったゼノに…お兄ちゃん。」

兄妹は約束を交わした。

そんなこんなでゲートに着いた三人

そこには地面に巨大な魔方陣が3つ描かれていた

「ほら！あの魔方陣がゲートよ！ゲートは30分に一回のペースで起動するようになってるのよ！」

「へー、それにしてもすごい人の数ですね。」

「もうすぐ午後5…30だから東地区の居住区に行く人がほとんどだけだね！」

「あれ？でも真ん中の魔方陣だけ人が少ないね。」

「んふふふ♪ よく気付いたね！二人共気をつけてね——」
スズカは珍しく少し引き締まった表情で説明した。

「——南地区は貴族街だから貴族や一部の商人以外立ち入り禁止なのよ……」

「へえー、なんで南地区に貴族が集まっているんですか？」

「それはね！——えっと、あれ！？ねえ、なんだったっけ！？」

ゼノの質問に、スズカは何故かミリアに答えを求めた。

「えっ！ いや、あたしに聞かれても…。」

「ということだからゼノ君！ ごめん♪わからないや♪」

この時ゼノはいまさらだがふと思った…。

（この人メンドクセー）

無駄話をしているうちにいよいよゲートの起動時間になった。

ゼノ達がいる西地区行きのゲートはそれほど人がいなかったが、2
つ隣の東地区行きのゲートはとても混雑していた。

「もう少し詰めてください！」 「いでっ！ てめえ何ひとの足踏んで
んだ！」 「ちよっと！ あんた今私のお尻触ったでしょ！！」 「えっ
！？ 違う！ 僕じゃない！ 本当だ信じてくれ！！」 「――！！ ゼい
でっ！ てめえ！！ 今度はスネを蹴りやがったな！！」 「それでは…
ゲート起動！！！」

次の瞬間、広場は静寂に包まれていた。

いや、広場自体が変わっていた。

「到着〜〜！ さあ学園を目指しましょう！ 学園までは真っ直ぐだ

から迷う心配は無いけどね！」

「いやいや！ちょっと待ってください！今なにが起きたんですか！」

「一瞬であの人達居なくなっちゃった…。」

狼狽える二人に対して、スズカは――

「ああ、大丈夫だよ！西地区のゲートに移動しただけだから！」

と告げた。

「あんな一瞬で？」

「これが王都か…。」

と、よくわからない結論をだす二人だった。

――
――
――
――
――
――

「さあ、着いたよ！ここが第一魔法学園よ！」

目の前には石造りの巨大な建物が建っていた。

「――すげえ…。」

「――王都に着いてまだ数時間しか経ってないのに……一生分驚いた気がする。」

田舎育ちの二人にとって、学園はものすごい迫力があつたようだ。

「後はその受付のおばさんに聞いたら学園と学生寮までの地図をもらえるからね!!」

「あっ! はい、わかりました!」

「どうもありがとうございます。」

「どういたしまして! 何かあったら何時でも頼ってね! それじゃまたね!」

そう言うとスズカは去っていった。

「悪い人では無いんだよね……」

「疲れるげどな……」

二人はそう呟いて、その背中を見送った。

6話 Another side

side : . ? . ? . ?

~~~~~

『本当に行っちゃうの？』

『でも！』

『もう1つ約束して…』

『絶対にいつかわたしに会いに来て。』

~~~~~

……………今のは？

そうだ、あの時の――

「――夢？」

わたしは寝ぼけ眼を擦りながら、部屋中を見渡した。

「ここは？」

えっと……そうだ、思い出した。

ここは王都アトランドの東地区にある学生寮だ……

故郷のハング村から三日かけて、昨日の昼間に王都に着いたんだっ
た。

「ハング村か……」

わたしは自分の故郷のその村が大嫌いだ。

小さい頃、わたしは周りの子供と比べて魔法の才能があった。

5歳の時に適正属性を調べたら属性が3つある事がわかった。

6歳の時にはすでに基礎魔法が使えるようになっていた。

わたしが周りの子供から爪弾きにされたのはその辺だった。

誰もわたしと会話をしようとしなくなった。その内、目も合わせて
くれなくなった。

それどころか酷い時は化物と言われることもあった……ただ一人を
除いて……。

そのくせ、3年前にわたしが第一魔法学園中等部の受験に受かったら周りの態度は一変した。

それまでわたしを除け者にしてた村の子達は途端にわたしに集まってきた。

正直、気味が悪かった。自分のことを打算的な目で見られている気がした……あの人がいたらきつと心の底から喜んでくれたんだろうな……。

「やめよう、朝から……。」

どうやら昔の夢を見たせいで嫌なことを思い出しちゃった。

「さあ、今日も1日頑張ろう！」

まあ、学園が始まるのは2日後だけだね。

ガチャ——

ドアが開く音がしたから見てみると、そこにはさっきから姿の見えなかったルームメイトがいた。

「おはよう！ナズナちゃん！」

「おはよう。もう昼だけどね。」

「えっ、うそ！」

わたしは慌てて時計を確認した。

「ホントだ！もゝ何で起こしてくれなかったのお母さん!？」

「いや、誰がお母さん？」

――――

わたしは北地区にある「オルデインの武具屋」に向かった。

――ボタン！

「おはようお爺さん！」

「うるせえぞ赤頭!!もつと静かに入れ!!それから世間ではすでに『こんにちは』だボケ！」

この、王都では珍しい着流しを着たお爺さんは《杖師》のオルデインさん、アトランドの知る人ぞ知る名物職人――

「誰が名物だ!!！」

――もとい名職人

「まったく、久しぶりに顔を合わせたと思ったら……それに若いくせにこんな時間まで寝やがって……」

「そ、そんなことないですよ……?。」

「その『?』は何だ?……まったく、寝癖ぐらい直してからこい。」

オルデインさんは羨望の眼差しでわたしの赤い髪の毛を見ている。

「何適當なこと言ってるんだ!! 呆れてんだよクソガキ!!」

「そんなことよりオルデインさん、頼んでいた《杖》は?」

「このっく!! ったく! ちよつと待ってろ」

そう言うオルデインさんはカウンターの奥へ入って行った。

「ここで《杖》について説明すると、《杖》とは魔術師が魔法を使用する時に使う道具の総称のことで、昔は全て杖を使用してたからその名残らしい。

今では、魔術師個人によって使用する《杖》は異なり、人によっては剣や盾を《杖》として使用している場合もある。」

「――で、誰に説明してんだ?」

いつの間にかオルデインさんは戻って来ていた。

「いや、退屈だったからつい。」

「……とにかく、ほら! オマエさんの注文通りの仕上がりだ。」

そう言いながら、オルデインさんは木製の長杖を手渡してくれた。

「柳の枝を削って作った一品だ。クセはあるが、まあオマエさんなら大丈夫だろう。」

「ありがとう！」

「なあに、構わんさ。今年からギルドでクエストを受けるんだろう？ また何か必要になったら何時でも注文しにこい。前払いしか受け無いけどな。」

「うん！ それじゃ！」

「オウ！」

わたしはオルディンさんに別れを告げて店を出――

「あ、その前に」

――る直前で、さっそく新しい《杖》で風魔法を使って寝癖をなおした。

「…もっとマシな使い方をしろよ。」

――
――
――
――
――
――

わたしが上機嫌で店を出ると――

「これはこれは、ルミールさんではないですか。」

突然ギザッたらしい口調の青年が話しかけてきた。

「……何か用かしら？」

こいつはシムジウ・ハング、名前から解るようにハング村の出身で、
ついでに村長の孫だ。

「いえいえ、偶然見かけたので挨拶をと思ひましてね。」

シムジウは不愉快な声で続けてきた。

「どうもご機嫌がよろしいようですね？」

あんたに声をかけられるまではね……

「貴方には関係ないでしょう？」

わたしは冷たく、そう言った。

「おや、その長杖は？まさかとは思いますが、またあんな小汚い老人の店で購入したのですか？」

「それがどうかしたのかしら？オルディンさんはとても腕のいい職人よ。」

「冗談でしょう？この僕の依頼を断るような老人ですよ？」

「あいにく、オルディンさんは客を選ぶのよ。」

「ふん、この天才の僕以上にふさわしい客がドコにいますか？」

誰が天才なんだか……3年前に学園に受かる前は散々わたしのことを化物と罵っていた癖に。

「たくさんいるわよ。…それに貴方以上の実力を持っている人はもつというわ。」

実際にこいつは学年で中堅程度の実力だし、そのうえ今年から高等部になるから人数は倍近くになるというのに。

「っそんなもの！僕の才能が目覚めるまでの間だけだ！」

なにそれ？新しいギャグのつもりかしら？

「――コホン、失礼しました……。どうですか？お詫びにこれから一緒に食事でも。」

「遠慮しておくわ、さっき食べたばかりだから。」

「そうですか。それもそうですね、もう4…30ですしね。」

「それじゃあさよなら。」

わたしはそう言い放ってその場を後にした。

……というかもう4…30だったんだ。朝も昼も食べてないからお腹すいた。

— — — — —

「ここにしようかな。」

わたしは「喫茶アルバトロス」と書かれた扉を開こうとして—

『あれ！君達魔法学園の生徒なの！？』

(……今の声は)

『もちろん！ 明後日から高等部の2年になるのよ！』

踵を返してその場を立ち去った。

うん、別の店に行こう！

— — — — —

「……た、食べ過ぎた。」

わたしは眩きながらゲート向かった。

起動まで、あと少し。

あの後近くの食堂で遅めの朝食兼昼食を食べた。あの自称天才との

会話のせいでストレスがたまってたからヤケ食いしてしまった。
体重は……大丈夫だよな？朝は食べてなかったし。

そんなことを考えているうちにゲート着いたら――

「もう少し詰めてください！」

――今まさにゲートが起動しそうになっていた。ってヤバイ！

わたしは慌てて魔法陣に駆け込んだ、途中で何かを踏んだり、長杖が誰かにぶつかった

「いでっ！てめえ何ひとの足踏んでんだ！」「ちょっと！あんた今私のお尻触ったでしょ！！！」

ヤバイ、大事になってる……

わたしは気まずくなり目をそらした。

その時ふと、西地区行きの魔法陣が目に入った。

「――！！！」

あの灰色の髪の毛は――

「ゼノ！！！」

わたしは咄嗟に叫んだ。けど……

「それでは……ゲート起動！！！」

その直後魔法陣が淡く光り、一瞬で東地区に移動していた。

「警備員さん！！この人痴漢です！！」「なっ！！だから違う！」
「うるさいわね！！犯人は皆そう言うのよ！！」「さっきからうっ
せえぞそのババア！！心配しなくてもてめえを触るゲテモノ好き
なんざ居ねえよ！！」「何ですってー！」

見間違えだったのかしら？……でも、もしかしたら…。

それはともかく――

「ごめんなさい。わたしの長杖が当たっちゃったみたいで…」

とりあえず誤解を解いておこう。

――
――
――
――
――
――

「はぁ……。」

あの後、次のゲート起動で西地区に行き、1時間近く探し回ったけど結局見つからなかった…。

「はぁ……。」

わたしはもう一度ため息を吐いた。

やっぱり見間違えだったんだ…。

わたしは寮に帰り、部屋のドアを開けた。

「お帰りサラちゃん！もう、遅いから心配したよ～～～！」

わたしはナズナちゃんに謝ってからベッドに倒れこんだ。

今日は疲れた。

6話 Another side (後書き)

6話目にしてやっとヒロインをだせました。

ぜんぜん再会してないけど……

7話 擦れ違い

＼side..ゼノ＼

さて、今日の予定はと…

「とりあえず西地区は学園が始まってから行けばいいか。」

よし！今日は王都の冒険者ギルドに行こう！

＼side..サンドラ＼

今日はちゃんと午前中に起きた。

そういえば、休暇中にギルドに登録するように言われてたっけ。

よし！今日はギルドに行こう！

「ねえ、ナズナちゃんはもうギルドに登録した？」

「え、そういえば忘れてた。」

「じゃあこれから一緒に行く？」

Side out

――――

第一魔法学園の学生寮は十階建ての建物であり、入って右側が男子で左側が女子に別れている。

また、2～4階が中等部、5～10階が高等部となっている。

ちなみに学生寮は全部で5つあり、それぞれ五大属性の名前を一つずつと呼ばれている。

30分後・『火の学生寮』一階ロビー

「ミリアのやつ遅いな…」

すると、女子部屋の方から

「あら？ えっとおはようございます。」

ナズナが降りてきて、ロビーにいたゼノに挨拶した。

「あ、どうもおはようございます。」

「あの、新しい管理人の方ですか？」

と、ナズナはゼノに質問した。

「え？ いや、一応生徒ですけど…。」

「そうなんですか？ すいません、制服を着ていなかったからつい…。」

現在のゼノの服装は、ごく一般の冒険者が着る魔物の皮製の茶色いズボンと布の赤いシャツの上に黒いレザージャケットを羽織ったものである。

対して、ナズナは学園の制服である。

「やっぱり制服を着ていないと不味いですか？」

「いえ、そういうわけではないですよ。」

と、そこへ

「ごめーん！ まった？ ゼ…お兄ちゃん！」

ミリアが降りてきた。もちろん制服姿で。

「お兄ちゃん、どう？ あたしの制服」

「ん？ ああ、よく似合ってるぞ。」

「えへへ♪ ところで、お兄ちゃんは制服着ないの？」

「そうだな…ちよっくら着替えてくるわ。えっと、それじゃあ失礼します。」

そう言うときゼノは階段を上っていった。

「あの、おはようございます。」

ミリアはナズナに挨拶をした。

「おはようございます。貴女は？」

「はい！はじめまして、今年から中等部の一年になるミリア・アルフレインといいます。」

「そっか入学組なんだ。はじめまして、私は高等部の一年でナズナ・イスルギっていうの、よろしくねミリアちゃん。」

「こちらこそ宜しくお願いしますナズナ先輩。」
(あれ？イスルギってどこかで聞いたような？)

もちろんヤツのことである。

「ところで、入学組って何ですか？」

「入学組っていうのはミリアちゃんみたいに、中等部の一年から学園に通っている人のことよ。ちなみにそれ以降に学園に通っている人は編入組と呼ばれているわ。高等部から通う人もそうね。」

「ナズナ先輩はどっち何ですか？」

「私は中等部の二年からだから編入組よ。」

と二人が話し合っている内に

「ごめーんナズナちゃん！お待たせ！」

サンドラが階段を降りてきた。

「もう、遅いよサラちゃん。」

「ごめんね。靴下が見当たらなくて……あら？その子は？」

「この子は新生生のミリアちゃんよ。」

「へえ、新生生なんだ。わたしはサンドラ・ルミール、ナズナちゃんのルームメイトよ。気軽にサラって呼んでね。よろしくミリアちゃん！」

「こちらこそよろしく願いますサラ先輩。」

「ねえ、もしよかったら一緒に来る？王都を案内してあげようか？」

とサラは提案したが

「すみません、実は今日は寄るところがありまして……それに兄もいますし。」

「そっかぁ残念。それじゃまたねミリアちゃん」

そう言う二人は寮を出ていった。

タッタッタツ……

「お待たせ！ごめんごめん、ベルトが見つからなくて！」

「遅いよゼノにい、早く行こう！」

遅れること5分、ようやく二人も寮を出た。

――
――
――
――
――
――

「ナズナちゃん！あと1分しかない、急いで！」

「もう、サラちゃんが遅れるから！」

二人がゲートに着くと同時に

「それでは、ゲート起動！」

魔法陣が淡く光だして転移魔法が起動した。

一方、

「ゼノにい、あと1分しかないよ。」

「仕方無い、次の起動時間までその辺の食堂で朝飯食べてようか。」

――――

所変わって、冒険者ギルド

冒険者ギルドとは、大国アトモス、東国、そして西にある聖皇公国の三ヶ国に支部が点在する「国境の無い冒険者組織」のことである。

閑話休題

「着いた！」

「いつ見ても大きな建物だよね。入るのはじめてだけど。」

サラとナズナの目の前には、石造りの建物があった。

高いは4階程度だが一階辺りの面積は、他の建物の2・5倍ほどあ

る。
入口にある「剣と長杖を交差した標識」が冒険者ギルドの紋章である。

二人が入ると、中は騒音が響いていて女性職員が慌てて駆け寄ってきた。

「どうしたの君達？まだ学生でしょ？」

「？ 今年から高等部になるので登録しに来たんですくど。」

すると職員は困ったように――

「じゃあ、とりあえずこっちに来て。」

二人を階段の方へ促した。

階段を上る前にサラがチラリと1階を見てみると、1階は酒場になっていた

一行は2階の受注所にやって来た。ちなみに3階は資料部屋、4階は関係者以外立ち入り禁止となっている。

そのまま奥にあるテーブル席に着くと、先ほどの職員が口を開いた。

「ごめんね、今下の酒場でパーティー間で言い争いになっているところなのよ。」

「なるほど…」

「じゃあ、担当者と呼んでくるからちょっとまってね。」
そう告げると職員は受付の奥に歩いて行った。

サラが周りを見渡してみると、近くのテーブルで学園の制服を着た男の子が別の職員に何かが書かれた紙を手渡しているのが目に入った。

そのうち、メガネをかけた男性職員がやって来た。

「お待たせしました。それではこちらの紙に必要な事項をお書きください。」

そう言って二人に一枚ずつ紙を手渡した。

紙には名前、適正属性、《杖》の種類などの項目が書かれていた。

「あ、あの質問しても良いですか？」

記入しながらナズナが控えめにきいた

「名前はわかるんですけど、なぜ適正属性や《杖》の種類を書く必要があるんですか？」

「ああ、それは冒険者どうしがパーティーを組むときの目安になるし、何より成り済まし防止の意味があるんですよ。」

「成り済まし：ですか？」

「ええ、極希にそういったことをする迷惑な冒険者がいるんですよ。」

と職員は答えた。

それから暫くして

「よし、書けた！ナズナちゃんは？」

「うん、私も今書けた所。」

「それではお預かり致します。ギルドカードの作製には少し時間がかかりますのでご了承ください。」

「わかりました。」

「それじゃ、上の資料室で時間を潰してようか。」

そう言って二人は階段を登って行った。

その頃一階では、

「このクソガキ！覚悟はできてんだろうな！！」

灰色の髪の毛の少年が酔っ払いに絡まれていた。

「どうしてこうなった……。」

少年は何の面白味もないテンプレなセリフを呟いた。

7話 擦れ違い（後書き）

ご意見、ご感想をお待ちしております。

8話 邂逅

話は少し前にさかのぼる

（side…ゼノ）

朝食を食べ終えたからゲートを使って北地区にやって来た。

「そういえばゼノに、ギルドに何しに行くの？」

「昨日門番のおじさんが高等部は授業の一環としてギルドでクエストを受けるって言ってただろ？だからどんなのがあるか確認しておきたくてさ。」

「ふーん。」

「それよりミリアは何処に行きたい所でもあるのか？」

「あたしは武器屋に行きたいな。」

「新しい《杖》でも買うのか？」

「うん。さすがにいつまでもこれは…ね。」

そう言いながらミリアは腰に携えている物を指差した。

たしかに学園でそんな物使っていたら『自分田舎者ですよ』と大声

で叫ぶようなもんだしな。

「よし！それじゃ先に武器屋に寄ってみるか！」

「いいの？」

「ま、可愛い妹のためだしな。」

「そんな！可愛いだなんて！！……えへへ……でも『妹』としてか
…。」

ミリアは顔を赤くしたと思ったら、今度は何かを呟きながら俯いた。
体調悪いのか？

「どうした？風邪でもひいたのか？」

「大丈夫…ちょっと複雑な心境になっているだけだから…。」

「そうか？無理するなよ。」

さてと、昨日スズカ先輩に教えてもらった武器屋はと…。

— — — — —

「なんか期待はずれだったね。」

「だな。」

武器屋で扱っていた武器は、ほとんどが量産品のナマクラばかりだった。

「どうする？あと近くにあるのはその怪しげな店しかないぞ。」

看板には掠れた文字で「オルデインの武具屋」と書かれていた。

「うーん、どうしようかな？」

やっぱり躊躇するよな。

「ダメモトで行ってみる。」

「わかった。」

――
――
――
――
――
――

ギギギギギ……

「――扉の立て付け悪いな……」

俺は思わず呟いた。

「でもゼノにい、売ってる物はさっきの店よりも良さそうだよ。」

見てみると、地味だが丈夫そうな武器や防具が並んでいた。

「ほう、よくわかってるじゃねえかお嬢ちゃん！」

奥から毛むくじゃらなお爺さんが出てきた。

「気に入った物はあったか？」

「そうですね……できるだけ軽くて丈夫な剣はありますか？」

お爺さんがしゃべりかけてきたからミリアが質問した。

「あん？レイピアじゃ駄目なのか？」

「突くための剣じゃなくて切るための剣が欲しいんです。」

ミリアはおじさん、いや父さん直伝の剣術を使うからな。

「《杖》用の武器か？」

「はい。」

「じゃあ今使ってる《杖》を見せてみる。」

「え！えっと…あの…これです。」

ミリアは恥ずかしそうに自分の《杖》をカウンターに置いた。
さっきの店で見た時は店員に変な眼で見られたからな…

「鉈とは変わったもん使ってるな。」

ミリアは腕力がなく普通の剣では重すぎるため鉈（薪割り用）を使ってる。

「うーむ、なるほどな…」

お爺さんは鉈を一通り観察して、口を開いた。

「おし！ 気に入った！ お嬢ちゃん、《杖師》の名に賭けてオマエさんにピッタリな《杖》を打ってやる！」

「ホントですか！？」

「《杖》の手入れが行き届いてるからな。逆にワシは《杖》をだいにしない奴には売らんがな。」

ずいぶん職人気質なお爺さんだな…

「それとそのボウズは何か買うのか？」

「え？ いえ特には」

「とりあえず《杖》を見せてみる。」

仕方ないな…

俺はポケットにある物を取り出した。

「あ？ 何だこりゃ？」

「何って、ただの金属片と植物の種ですけど何か？」

お爺さんは俺が取り出したガラクタを陶醉しきった表情で

「しとらんわ!! 最近のガキはみんなこうか!!」

「まあ、俺のことはいいですよ。それより妹の《杖》はいつ頃できますか？」

「…まあ材料はそろってるし、せいぜい2日ぐらいで出来上がる。他に注文も無いしな。」

ただ、まだお嬢ちゃんは正式に注文したわけではないがな。」

「わかりました。どうするミリア？」

「あたしはお願いしたい。」

「じゃあそういうことで。」「わかった。ちなみに料金は――今回は初回だから後払いでかまわん。」

普段は前払いなんだ…

「じゃあ、俺はギルドに行くけどどうする？」

「あたしはもう少しここで商品眺めてるよ。」

「わかった、後で迎えに来るよ。」

そう言って俺は外へ出た。

それにしても、アクセサリより武器に興味津々な妹って……お兄ちゃんは心配だ。

――――

「……デッケー」

これが王都のギルドの第一印象

「こんなにデカイの建てる必要ないだろ……。」

「まあいいや中にはいろ」

扉を開けたら女性職員が近づいてきた

「えっと、君学園の子よね？登録に来たの？」

「いえ、ギルドカードならすでに持ってます。ただ王都に来たのはじめてなのでクエストを確認しようかと」

「あら、そうなの？」

何か疑われてる？

「確認させてもらえる？」

「……それは義務ですか？」

「一応ね。でもそんなに警戒しなくても大丈夫よ。守秘義務があるから。」

必要以上に見せたくないんだけどな。

「わかりました。どうぞ」

俺はカードを職員に見せた。

「どれどれ？——！！ちょっとこれムグツ」

俺は慌てて職員の口を塞いだ

「守秘義務は！？」

「プハッ、ご、ごめんなさい。」

うわ、手がベトベトだ。

「それにしても噂の『牙折り』に会えるとわね。」

「……あんまりその名で呼ばないでくれませんか？」

そう言いながら俺は職員の服で手を拭った。

「タオル渡すからやめてちょうだい！」

職員がタオルを取りに行った

——その時

ドン！

職員が学園の制服を着た知らない男の子とぶつかった。

そしてそのまま男の子は言い争いをしていた冒険者達にぶつか—
る瞬間にその内の一人が偶然振り上げた腕にぶっ飛ばされて側に居
たソロの酔っ払い冒険者にぶつかって、そのままその場に崩れ落ち
た。

……いや、何これ？

「だから何度も言って、ん？ ああ！ 君、大丈夫かい！！」

喧嘩をしていた冒険者達は男の子を介抱しだした。

職員は、いつの間にか居なくなってやがる。

「おい！ イテえだろうがガキ！！」

酔っ払いが俺に向かって叫んでいる。

いや俺！！？

「いや俺は関係ないでしょう！？」

「惚けてんじゃねえぞ！ 制服着てるじゃねえか！」

ちなみにさっきの男の子は冒険者に囲まれて、酔っ払いの死角にい
る。

この酔っ払い…服装じゃなくて顔を覚えろよ

「このクソガキ！覚悟はできてんだろうな！！」

「どうしてこうなった……。」

あれか？俺が職員の服で手を拭いたのがいけなかったのか？

「ちよっと落ち着いたらどうですか？」

「黙りやがれ！ぶっ殺す！！」

そう言って酔っ払いは剣を抜いてきた……

「――抜いたな？」

その瞬間、俺は表情を消した。

（side…サンドラ）

そろそろカードもできたかしら？

「サラちゃん、そろそろ戻ろう。」

どうやらナズナちゃんもそう思ったようだ。

「そうね、行こう。」

『タオル渡すからやめてちょうだい!』

途中、下から何か聞こえたけど無視した。

「ああ君達、ちょうどカードができましたよ。」

2階に戻ったらさっきの男性職員がそう告げた。

「こちらがギルドカードになります。」

カードには名前とギルドレベル、そしてよくわからない項目の三つが書いてあった。

「カードについて説明致します。まずギルドレベルになりますが、こちらは受注可能なクエストの最大難易度になります。簡単にいえばこのレベル以下のクエストしか受けることができません。レベルを上げるにはある程度クエストをこなして頂くと、特別クエストが受注可能になり、それをクリアすればレベルアップになります。

また、レベルは低い方から1〜10となっておりますが6以上になるには学園卒業が義務付けられています。

次にクラスの説明にまいります。クラスとは今現在使用している《杖》やその他武器によって呼ばれる名称のことです。

《杖》を変更した場合、クラスも変わりますのでご報告して下さい。ここまでに何か質問はございますか。」

「バナナはオヤツに入「それではまたのおこしを!」

職員はわたしのボケを無視して奥に引っ込んでいった。

「じゃ、帰ろっか。」

「そうだね。」

その時――

バギイイイイイン

「何！？今の音！」

ナズナちゃんが狼狽える

「下からだわ！！！」

わたしは急いで階段を駆け降りた。

一階では、尻餅をつきながら刀身が折れた剣を持った顔の赤い冒険者を

灰色の髪少年が見下ろしていた。

あれは――

「ゼノ……？」

わたしは無意識にそう呟いていた。

9話 再会と…

「さて、それじゃあ説明してもらおうかが共！」

場所はオルデインの武具屋、その店主の目の前に男女二人が正座をしていた。

「いや、あのですねー」

サラがぎこちなく口を開いた。

先ほどギルドの酒場でひと騒動起こしたゼノは、

（やべっ！ 気まずい！）

そそくさとその場を後にした。もちろん階段付近にいるサラには気付いていない。

一方、サラはしばらく思考停止した後

（はっ！ こうしてる場合じゃない！！）

我に返り、急いで後を追いかけた。

ついでにナズナは

（さっきの人は、今朝会ったミアちゃんのお兄さん？ ……って、サラちゃんがいつの間にかいない！！）

――置いてかれた。

（クエスト確認出来なかった。 まあいいや。）

そしてゼノはミリアを迎えにオルデインの武具屋の扉に手をかけて

――

「ゼノーーーーー!!!!!!」

「ん？ ブベラっ!!」

直後サラの特攻によってそのまま扉を破壊して店内になだれ込んだ。

「まってよサラちゃん!!」

ついでにナズナ到着。

「――というわけでして…。」

「とりあえず、赤頭。 オマエは何回うちの扉を壊す気だ。」

オルデインは静に、それでいて物凄いプレッシャーをこめて言った。

「月1のペースでぶっ壊しやがって。あれか？扉に怨みでもあるのか？それともワシに対する嫌がらせか？」

「いえ、そんな！滅相も御座いません！」

「それから、その若白髪」

「若白髪！？」

オルデインは今度はゼノに向き直って喋りだした。

「オマエがもっと遅めに歩いていたらうちの扉は無事だったんじゃないか？」

「ちょっと待ってください！！そんな無茶苦茶な！！——白じゃなくて灰色です！生まれつきの！！」

ブチッ！！

「そっちじゃっつっつっつ！！ねえええええだ！！ろおおお
おおおおがあああああアアアアア！！」

オルデインはキレた。

ちなみにその他二人はすみっこで震えていました。

（五分後）

「で？結局何でオマエはそのガキにタツクルをブチカマしたんだ？」

「えっと、その五年ぶりだからつい…。」

「じゃあボウズ、オマエは何でお嬢ちゃんに背を向けてたんだ？」

「なんていうか……考え事をしていて気付きませんでした。」

オルデインはため息をついた。

「とりあえず、今日はもう閉店だ。後はテメエらでかってにしろ。」

そして一行は寮に戻って行った。

「――さてと、さっさと扉を直して《杖》を作んねえとな。」

――
――
――
――
――
――

「じゃあ、あらためて自己紹介から。私はナズナ・イスルギ、よろしくね。」

「あたしはミリア・アルフレインです。よろしくお願いします。」

「……………」

「ほら、お兄ちゃんも自己紹介して。」

「いやその前に何で俺の部屋に集まってんだ？」

「だってお兄ちゃんは女子部屋に入れないでしょ？」

「それにロビーで話すのもちょっと…」

ここでサラが徐に口を開いた。

「あのさ、ゼノと二人で話したいんだけど……二人共いいかな？」

「わ、わかった。」

「それじゃ…」

ナズナとミリアは部屋を出た。

「……聞いてもいい？」

「……ああ。」

サラは深呼吸して、ゼノに問いかけた。

「あの時約束は——」「ごめん……」

ゼノは質問を遮って喋りだした。

「結局、剣士にはなれなかった……」

「……そう。」

サラは静に立ち上がり、そのまま部屋を出ていった。

「ちょっとまってよサラちゃん」

ナズナが後を追いかけた。

「ゼノにい……」

「……仕方ないさ。あの時の約束を破った俺が悪い。」

「でも！」

「それにさ、正直どうやって接すればいいか解らないんだ…」

ミリアにはそれ以上何も言えなかった。

「サラちゃん！さっきのは酷すぎるよ！ずっと会いたかった相手な
んでしょ？」

ナズナの問いに対してサラは

「…う…よう」

「え？」

「どうしよう！！話したいことがホントはイッパイあるのに！！あ
あでもいざとなると緊張して会話が續かないし！」

「……えーっと、怒ってたんじゃ無いの？」

「そうじゃないの！！——まったくショックを受けなかったと言え
ば嘘になるけど…でも！」

サラは半狂乱になりながら喚いている

「さっきので嫌われて無いかな！ねえ！」

「——ドウダロウネ」

その後、ナズナがサラを落ち着かせるのに四時間かった。

9話 再会と…（後書き）

次回からようやく学園生活がスタートする予定です。

自分の文才の無さが怨めしい……

10話 二人の不安（前書き）

はじめに謝っておきます。

結局今回は、学園開始直前で終わります。
どうもすみません。

10話 二人の不安

side..ゼノ

朝か……。

今日から学園生活が始まるのに気が重い。

「まあ仕方ないか……」

そう呟いてから部屋を見渡してみた。すると、

「あ、おはようございます……。」

知らない男の子が居た

「曲者……!!」

「ええっ!!」

とりあえず、叫んでみた。

「で、君はだれ？」

「いや、何で今叫んだの？」

「ムシャクシャしてやった。誰でもよかった。」
「ごめん、意味が解らない。」

さて、ふざけるのはここまでにしとくか。

「それで君は？もしかしてルームメイト？」

「あ、うん。はじめまして、僕はマルク・マグリットといいます。」

「俺はゼノ・アルフレイン、よろしく。」

俺は先ほどから疑問に思っていることを聞いた。

「ところで、学園開始当日に入寮なんて珍しいね。」

「あー、実は昨日王都に着いてさ。そのままギルドに登録しに行ったらちよつと事故にあつて、深夜まで北地区の宿に寝かされてんだ。」

ん？それって……

「もしかして、職員とぶつかった後に冒険者に偶然殴られたりした？」

「……よくわかったね。」

そりゃあ

「現場にいたからね。」

昨日ギルドにいたあの子だったとは……笑うしかないな。

「……ま、まあこれからよろしく……」

「ああ、こちらこそ。」

「じゃあ僕はもう行くよ、また後で。」

マルクはそのまま学園に向かって行った。
俺も準備するか……

――
――
――
――
――
――
――

一階に降りたら偶然サラとナズナに会った

「あ、……おはよう」

「おはよう、 えっと、 その……じゃあわたし急いであるから！」

そう言ってサラは行ってしまった。

「ちょっと！ サラちゃん！ ……行っちゃった。」

俺はナズナに聞いてみた。

「やっぱりサラは怒ってる？」

「いや、違うんじゃないかな……」

もしかして気を使わせたかな？

「それより、早く行かないと！」

それもそうか……

俺達は学園に向かって歩き出した。

（side out）

ゼノとナズナはそのままなんとなく並んで歩いていた。

「あのさ、聞いていいかな？」

沈黙に耐えられずナズナが質問した。

「その、何で剣士になるのを諦めたの？」

サラのルームメイトであり親友でもあるナズナはじつは以前、ハン
グ村時代のゼノの話をサラから聞いていた。というか何度も聞かさ
れていた。

だからこそ疑問に思っていた。

（サラちゃんの話聞いた感じだと、簡単に諦めるような人じゃな
いと思うんだけど…）

「……結論から言ったら才能がなかったからかな。」

「どう言うこと？」

「十歳のときに今の父さんに引き取られてすぐに剣術を習ったんだ」

「それで？」

「3日目の夕方に言われたよ、『オマエ驚くほど才能無いな!!』って、しかも笑顔で。」

「でもそれだけで――」

「もちろん俺もそれだけじゃ諦めなかった。来る日も来る日も剣を振った。朝から晩まで振り続けた。

そして、父さんは来る日も来る日も『全然進歩しないな!』とか『ここまで見込み無いと逆に笑えるな!』とか言って爆笑し続けた。本人に悪気は無かったけどそのたびに母さんにぶっ飛ばされてた。」

「……………」

「1日も休まず剣を振り続けたから、その甲斐あって体力と筋力だけは順調についていったよ。そして、半年が経過した。

ある日、俺の訓練を見ていた妹が父さんに『あたしもゼノにいいといっしょにしゅぎょうしたい』と言った。」

「……………それから？」

ナズナは嫌な予感しかしなかったがそれでも聞いた。

「10日で剣技を追い抜かされた。さすがにショックでそれ以来、剣術は諦めたよ。ちなみにミリアは当時8歳だったっけ。」

「……………軽々しく偉そうなこと言って本当にごめんなさい。」

（サラちゃん、ゼノくんは根気よく頑張ってたみたいだよ……………悲しいぐらい。）

「まあ、昔のことだしもう吹っ切れたけどね。ただ、やっぱり約束を破ったのは心残りではあったよ。……………結局2つ共破ることになったけど。」

「2つ？」

「『剣士になる』と『会いにきて』、どっちもできなかったけどね。」

「それは再会出来たんだから約束は果たしたんじゃない……………」

「今思えばさ、もっと早く会いに行けたんだ。でも出来なかった」

「どうして？」

「恐かったんだ。約束を破ったことで拒絶されるんじゃないかって思うと。」

ゼノは苦笑しながらそう答えた。

（ゼノくんはどんな心境で自分のことを話してくれたんだろう？
今まさに（本当は違うけど）サラちゃんから拒絶されてる状態なの。）

結局それ以上、二人の会話は続かなかった。

――――

～side～サラ～

はあ～～～～～～～～～～～～～～～～……
やってしまった。どうしても面と向かって話ことが出来ない

「はあ～～…」

「おはようございます。」

振り返ってみるとミリアちゃんがいた。

「おはよう……」

「少しお話してもいいですか？」

「うん、いいよ。」

「昔のお兄ちゃんについて話を聞きたくて」

「何でまた急に？」

「いえ、確認しておきたくて。」

よくわからないけど、何か考えがあるみたい。

「昔のゼノは……常に自分以外のことを考えて行動する子だったんだ。」

わたしは記憶を探る。

「ハング村では、その年に五歳になる村の子供達を集めて全員の適正属性を調べるんだけど……わたし達の年ではとても騒がれたわ。正確に言えばわたしとゼノの結果がね。」

当時五歳になったばかりだったっけ。

「わたしの適正属性は3つあった、これはハング村では異例のことだったの。」

対してゼノの場合、ハング村どころか歴史上でも異例中の異例だったわ。」

「それは知ってます。お兄ちゃんには何故か適正属性が存在しないんですよね。」

ゼノは誰よりも悪い結果だったのに……それでもわたしを本気で祝福してくれたっけ。
でも

「その日から周りの子供達はゼノのことを蔑んだわ。大人達はゼノに興味が無かったのか、それを注意する人はいなかった。」

今思い出しても腹がたつ。ゼノは何も悪いことなんてしてないのに。

「でもゼノは自分を馬鹿にされても何も言わなかった。そのかわり泣き言を言ったことも無かったわ、当時五歳の子供がよ。」

考えてみれば、ゼノが泣いているとこなんて見たことないや。

「そのくせ七歳になった頃、一人だけ基礎魔法が使えるようになった、そのせいでわたしが苛められたときは真剣に怒ってくれたの。」

自分の方が辛かったくせに

「――そんな感じだったわ。」

「だったら安心してください。」

ミリアちゃんは続けた

「お兄ちゃんは、ゼノにいは今も変わっていません。だから不安にならずにゼノにいと話あげて下さい。」

不安にならずに、か。

（少しがんばってみよう）

わたしはそう心の中で呟いた。

11話 波乱のクラス分け（前書き）

更新が遅れました。

今回は、2話あります。

11話 波乱のクラス分け

学園の校門前には次々に生徒が集まり、教師がそれを誘導していた。

「中等部の生徒は左側、高等部の生徒は右側の校舎に向かってください！」

学園の敷地の総面積は西地区の4割を占めていおり、敷地の中央付近に2つの校舎が並んでいる。校舎の高さはどちらも4階建てとなっている。

そして、その校舎を囲む様にさまざまな施設が敷地内にある。

「それから、入口で自分のクラスを確認してください！」

ついでに学園に通う生徒の人数について説明すると、まず中等部の1年生が200人、この200人が通称入学組と言われている。学園では1学年5クラスになっており、15歳未満の編入生は1クラス辺り5人、つまり25人ずつ2年生と3年生に加わることになる。よって中等部から進級するのは250人である。

そして、15歳以上の編入生は全員高等部の1年生として加わるのだが、高等部では毎年クラス辺り50人、つまり250人が編入するため、最終的に一学年500人になるのである。

学園では、入学組以外の300人のことを編入組と呼称しているのである。

そしてマルク・マグリットもその内の一人であった。

（はあ、王都に着いてすぐ気絶したり、ルームメイトはちょっと変な人だったり……ついてないな）

どうやら彼のゼノへの第一印象は「変な人」だったようだ。
第一声がアレなので無理もないが。

「次の人、名前は？」

「マルク・マグリットです。」

「えっと、マルク……あった、Dクラスへどうぞ。」

そのままマルクは教室へ向かった。

――
――
――
――
――

「繰り返します！中等部の生徒は左側、高等部の生徒は右側の校舎
に向かってください！」

「それにしても、王都の人は何でも大きくすればいいと思ってるの
かな？」

「いや、人が多いからだと思うよ」

ゼノとナズナは結局あれから会話も無く学園に到着した。

「いや、それでも大きすぎだって。学園は王立とか言ってるくせに

しっかり税金で運営されてるのに。」

ゼノは愚痴をこぼした。

「だいたい、お偉いさんは税金を無駄使いしすぎなんだよ!!子供手当てなんかすぐに廃止するべきだ!!」

「何の話!？」

「さあ？」

(……ゼノくんもサラちゃんみたいに突然ボケるんだ。)

ナズナの悩みの種が一つ増えた。

「次の人、名前は？」

「ゼノ・アルフレイン」

「ナズナ・イスルギです。」

「えーと、お約束どおり二人共Dクラスよ。」

(……また増えた)

ナズナの気苦労は続く

「クラスに着いたら担任の指示に従って席に着いてください。」

二人は教室に向かった。

一方、教室では。

「おやおや、『紅嵐』のルミールさんではないですか。」

サラは窓側の列の中程の席に座って、外を眺めていた。

「どうやら貴女もDクラスそうですね。」

（不安にならずに、昔みたいに……）

サラは耳に入ってくる雑音を無視して今後のことを考えていた。

「それにしても、高等部からこんな大勢の編入組なんかと同じクラスに居なくてはならないとは……生粋の入学組である僕達にはふさわしく無いとは思わないかね。」

「用件が無いなら話しかけないでくれないかしら、シムジウ・ハング」

サラはいい加減ウザくなったので、雑音の発生源をフルネームで拒絶した。

と、そこへ

「いた！よかった、サラちゃんも同じクラスだったんだ。」

ナズナが到着した。

「これで3年連続ね！」

と、二人が盛り上ったので

「ふん、編入組ごときが。」

シムジウはそう捨て台詞を吐いて席に戻っていった。

「何のアイツ！」

「気にしないでいいよ…。それより、ゼノくんも同じクラスだよ！」

それを聞いたサラは

「そうなんだ。（よし！）」

周りに見られないようにガッツポーズを決めた。

一方、そんなサラの気持ちに気付いていないゼノは

（どうやらサラも同じクラスみたいだな。）

「さてと、俺の席は……特に決まりもないし、廊下側の一番後ろでいいか。」

はからずもサラから遠くの席に座ろうとした。

その時――

「バカな！何故貴様がこの第一魔法学園にいるんだ！！」

偶然目があつたシムジウが叫んだ。

「その灰色の髪、貴様は落ちこぼれのアルフレインだな！！」

周りの生徒が突然喚き出したシムジウと、その矛先が向いているゼノに交互に視線を向ける。

「いくら編入組でも貴様のような無能が学園に入れるはずがない！さては何か卑怯な手段でも使ったな！」

と、どんどんヒートアップして行くシムジウに対してゼノは――

（いや、誰こいつ？）

まったく彼のことを覚えていなかった。

「てか、‘初対面’の相手にいったい何なのあんた？」

考えてみたがまったく思い出せなかったのでゼノは質問することにしたようだ。

「貴様！まさかこの僕のことを覚えていないのか！？　このハング村の村長の息子の僕のことを！」

そこまで言われてようやくゼノは思い出した。

「ああ！あの9歳までオネショしてた奴か！？」 「な！？」

クラスの生徒達は爆笑した

「貴様ーーーーー！」

シムジウはゼノに殴りかかろうとした、そこへ

「はい！全員席に着きなさい！」

担任がやって来た。

「ほら、とつとと座って！」

『覚えていろ、この――能無しが！』

シムジウはゼノに向かって小声でそう吐き捨てた。

side…ナズナ

あ、危なかった！……先生の到着が少しでも遅かったら、きっとサラちゃんは彼に魔法を放ってた…。

『サラちゃん！落ち着いて！ゼノくんなら平気だから！』

『何なのアイツ！ゼノに何の恨みがあるってのよ！！』

『たしかに酷いけど今は堪えて！』

私だってさっきのは許せないけど……でも何でゼノくんは平然としてるんだろう？

12話 騒動（前書き）

2話目です。

短いですがどうぞ。

12話 騒動

第一魔法学園では、新学期の初日と次の日は授業をせずに、二日に渡って生徒の能力測定を行っている。

担任が来た後Dクラスは学園の施設の一つ、室内闘技場に移動していた。

「それじゃ、《杖》を持って男女に別れて各自測定を行ってちょうだい。」

そう告げると担任は男子の方にやって来た。

「あの、先生は女性ですよね？」

「もちろん！だから女子の着替えを観てても面白くないからこっちに覗きに来ちゃった♪」

「いや『来ちゃった♪』じゃないでしょう！しかも今日は着替えたりしませんからね！」

初日は制服のままで五感と魔力の測定が行われるだけである。

「何ですって！？　じゃあ先生のこの興奮はどうすればいいのよ！」

「知りません！」

担任（32歳…彼氏無し）はこの後10分間も粘ってようやく諦めた。

――――

「お疲れマルク。」

「……ありがとう」

ゼノは担任に10分もの間、たった一人で対応していたルームメイトを労った。

「そういえば、アルフー」

「ああ、ゼノでいいよ。」

「じゃあゼノ、その……さっきのは何だったの？」

「教室のやつ？別に大したことじゃないよ。昔住んでいた村でちょっとね。」

ゼノは幼い頃のハング村での出来事をかいつまんで説明した。

「そこでその俺が学園に編入したのが納得いかなかったんだろう。」

「……って、ちょっと待って！ たったそれだけのことで何で――」

ゼノの話聞いたマルクは村の理不尽な行いを聞いて狼狽えた。

その様子をみたゼノは優しい声でマルクに言い聞かせた。

「ありがとう。でも別にマルクが怒ることじゃないよ。所詮昔のことだから。」

そのまま測定は進んで行き、残りが半分ぐらいになった時に、それは起こった。

「それじゃあ、あとは自由解散ね！ 先生はこの後合コンに行かないといけないの！」

それだけ告げると担任は一瞬で闘技場をあとにして、ゲートに向かって走っていった。

（あの人よくクビにならないな。）

クラス全員の気持ちがこの時だけまとまった。

「邪魔者は消えた！ さっきの続きといこうかアルフレイン！」

空気の読めないシムジウが叫んだ。

「さっきの続き？ オマエが9歳まで「違うわ！」

「適正属性のない貴様が学園にいる何てありえない！ いったいどんな方法を使った！」

「普通に受験したただけだけど。」

実際は3回失敗したが、それは高等部から編入した生徒のほとんどに言えることである。

「惚けるな！ 貴様のようなクズが——」「いい加減にしろよ！」

叫んだのは先ほどから隣にいたマルクであった。

「さっきから聞いてみれば、全部キミの言いがかりじゃないか！
ゼノに謝れよ！」

するとシムジウは矛先をマルクに変えた。

「何だ貴様！？ 編入組ごときが入学組の僕に命令する気か！」

「ああそうだよ！ だいたい入学組だから何だって言うんだ！
人として言っていることと悪いことの区別も付かないのか！」

「――――！！ 黙れこのクズが！！」 「うわっ！」

シムジウはマルクを殴りつけた。

「編入組の分際で調子にのるからだ！」

その時――！

「おい、 てめえ今何した？」

静に、しかし凄まじい怒気をこめてゼノが口を開いた。

13話 決闘（前書き）

戦闘シーンが下手くそだと痛感した今日この頃……

13話 決闘

ゼノとシムジウは闘技場の真ん中で向かい合っていた。

「ふんっ、無能の癖にこの僕に楯突くとはね。」

「不愉快だ。ベラベラ喋るな。」

ゼノは今怒っていた。

自分の為にマルクが殴られたことが我慢出来なかったからだ。

「入学組と編入組の差を見せてやる！」

学園の一部の生徒の間では「入学組が編入組より優れている」という考えが流行っている。

これは受験を勝ち抜いた入学組に対して、編入組は少くとも一回は受験に落ちているからである。

「入学組と編入組の差？ 結局たった三年間で縮まるぐらい大したこと無いものだったな。」

――だがゼノはそれを一刀両断した。

「貴様に思い知らせてやろう！この僕の――」

「前置きは要らない。先生の誰かが来る前にさっさと終わらすぞ。」

シムジウは自分の《杖》であるロングソードを構えた。 対してゼ

ノは棒立ちのままだった。

「貴様！《杖》ぐらい構えたらどうなんだ！」

「生憎だが俺は《杖》を持ってないんでな、そもそも基礎魔法を使うのに《杖》は必要ない。」

「ふん、落ちこぼれが、行くぞ！『ファイアボール』！」

シムジウのロングソードの切っ先から火球が飛び出した。

ゼノはそれをサイドステップでギリギリ避けた。

火球はそのまま闘技場の壁に当たり、当たった箇所が熱で溶けていた。

「精々逃げ回ることだな！『エアブレード』！」

今回は、《杖》を横に振るい風の刃を一度に二つ飛ばしてきた。

一つ目はやはりサイドステップでギリギリ避けるゼノ、しかし避けた先に更に二つ目の刃が飛んできた。

「おっと」

ゼノは身体を仰け反らして何とかこれも避けた。しかし、シムジウは既に火球を放っていた。

「水よ！」

ゼノは基礎魔法である大気中の水分を集める『水汲み』を使って、火球に水をかけたが、火球は一瞬スピードが遅くなるだけだった。しかし、おかげでゼノは体制を立て直して火球をかわした。

「はっ！ どうだ、これが僕の魔法だ。どうした！避けるだけで精一杯か？」

シムジウは余裕な態度で魔法を放っていた。

side…ナズナ

危ない！

さっきからゼノくんはほとんど魔法を使って無い、使ったとしても何の変哲もない基礎魔法だけで、しかもほとんど効果が無いみたい。

「サラちゃん！このままじゃゼノくんが！」

ゼノくんは飛んできたエアブレードをまたギリギリでかわした。

あのエアブレードは闘技場の石壁を軽々切り裂くぐらいの切れ味なのに。

「ねえ、サラちゃん！」

「すごい、まさかこれほど……」

「サラちゃん？」

何だろう？ ハングくんの魔法の威力なら中等部にいた同学年の子達なら知ってるはず？

現にこの場でもその威力に驚いているのは今年編入してきた子だけなのに。

「確かにハングくんの魔法はすごい威力だけど、今は感心してる場合じゃ——」

「違うわ！」

違う？

「すごいのはゼノの方よ！」

「どういうこと？」

（side out）

「そろそろ解っただろう無能！　これが才能のある者となない者の差だ！」

得意気にシムジウは言い放つ
しかし――

「いや解んねえな。」

ゼノは呆れたような口調でそう言った。

「確かに俺には魔法の才能も剣術の才能も無かったけど、
そんなに才能ないぞ。」　お前も

「何だと？」

「攻撃力はそれなりにあるが　……所詮それだけだ。」
「それは負け惜しみのつもりか！」

「宣言してやるよ。」
ゼノは冷めた口調で告げた。

「基礎魔法さえ使えればお前の魔法は誰にでも防げる。」

「ほざくな！ 『ファイアボール』！」

「まず一つ目の『火球』だが、熱量を高めることを意識しすぎたせいで炎が拡散している」

ゼノは右手を前に突き出して、樹の基礎魔法の『そよ風』を発動した。

「だから空気抵抗が強くなりスピードも出なければ、進行方向に対して斜めに風を当てるだけで逸らせる。」

宣言どおり火球は左方向に逸れていった。

「しかもその技、剣の切っ先からしか出ないみたいだから予測もしやすいしね。」

「バカな！？ 無能ごときが！ 食らえ！ 『エアブレード』！」
「次にその『風刃』だが……」

ゼノはゆっくりと歩み寄りながら続けた。

「切れ味とスピードを特化させたせいで軽すぎる。これも『そよ風』で簡単に逸らせる。更に――」

今度は地の基礎魔法の『石造り』で足下の土を石にして蹴り上げて風刃を迎撃した。

「刃の横腹はとても脆い」

シムジウは目の前の光景が信じられなかった。

「う、嘘だ！こんな……さっきまでかわすのがやっとだったやつが！」

「ハハハ……あの程度の攻撃をか？」

というより気付いてなかったみたいだな。俺が必要最低限の動きしかしてなかったのを」

ゼノは先ほどの攻撃をわざと、全て紙一重で回避していた。

「で？その自慢の才能とやらはもう打ち止めかな？」

「黙れ、クソっ！！ 『炎よ！集いて我が敵を焼き尽くすせ バー
ンフレイム』！！」

シムジウは中級魔法の『炎球』を放った。

「それも基礎魔法だけでいけるよ……」

ゼノはポケットから金属片と植物の種を取り出した

「『地よ』そして『水よ』」

『石造り』で空洞の石の玉を作りその中に金属片と水をいれた

「『雷よ』そして『樹よ』」

今度は金属片に『帯電』を使い、中の水を電気分解して、植物の種

を『発芽』させて蓋をした。

「最後に『火よ』、食らえ！」

そして植物の芽に『着火』をかけると同時にソレを迫り来る『炎球』にぶん投げた。

「そんな物で僕の『バーンフレイム』を防ぐつもりか！」

「もちろんだ。こいつは俺が考えた唯一の攻撃魔法だ」

そしてソレは『炎球』に呑み込まれ、そして爆発を起こしてた

「名前は……とりあえず『水素爆弾』とでも言っておくかな。」

そして爆発が起きたことで『炎球』の軌道がずれた。

「そ、そんな！　こんなの何かの間違いだ！」

「ちなみに今の魔法は発動に時間がかかり過ぎだ。」

そしてゼノは遂にシムジウに近くにたどり着いた。

「で、これで終りか？」

「あ、あ……　うわああああ！」

シムジウは錯乱しながらロングソードを振り下ろした。

「邪魔だ！」

ゼノはそう言うロングソードを素手で、殴り碎いた、

「そのまま寝てろ!!」

そしてそのままシムジウを殴り飛ばして勝負が決まった。

14話 約束の行方

「君達、何か言い訳はありますか？」

高等部校舎の生徒指導室でEクラスの担任のゲイリーは目の前で正座している二人に問いただした。

「じゃあ先ずは…… 貴女は自分の仕事をサボって何してたんですか？」

問いかけられたDクラスの担任のマオ・フェイは視線を右往左往させながら答えた。

「違うのよ！絶対！に外せない用事があったのよ！」

「あんた合コンに行ってたただけだろうが！」

ゲイリーはシャウトした。

「それから、新入生の君は何故決闘なんてしたんですか？」

問いかけられたゼノは

「黙秘します。」

黙秘権を行使した。

「……成績に響き「言い争いからヒートアップしました。」

黙秘権撤回

ゼノは包み隠さず話した。

「事情はわかりました。しかしやり過ぎだとは思わなかったんですか。」

「でも、最終的には一発殴っただけじゃないですか。」
ゼノは反論したが、

「その前に彼の《杖》を壊したでしょう。それに君のその一発のせいで彼は医務室送りだよ。」

ゼノに殴り飛ばされて気絶したシムジウは現在医務室で治療術をうけている。

「何よりあんな大勢の前で彼の魔法の欠点を暴露したのがよくない」
ゲイリーは咎めるような口調で言った

「下手したら彼は立ち直れなくなる。」

しかし――

「それがどうかしましたか？」

もっと大きな挫折を経験し続けたゼノにとって魔法の欠点を暴露される程度、何でも無いことだったため疑問にしかならなかった。

「いいですか？ 今後彼の魔法はアナタが実演した方法で無効化されてしまう、そうしたら――」

「じゃあ魔法を改良すればいい話じゃないですか。」

「はぁ……。どうやらこのまま話していても無意味のようですね。
……仕方ない、今日はもう帰ってけっこうです。」

「「わかりました。失礼します。」」

「アンタ（フェイ先生）は残ってください！」

――――

ようやく指導室から解放されたゼノ

外は既に夕方になっておりゲートまでの道を紅く染め上げていた。

「やり過ぎ……か。」

ゼノは誰にともなく呟いた。

そこへ

「ゼノ！ごめん、僕のせいで」

顔を見るなり謝ってくるルームメイトがやって来た。

「マルクの方こそ俺のせいで殴られたのに何で謝るんだ？」 「でも僕が殴られたからゼノが怒ってくれたんだろ？だからごめん……それとありがとう」

マルクは謝罪とお礼を照れくさそうにゼノに送った。

「……なあマルク」

「何だい？」

「……俺はやり過ぎだったか？」

ゼノは先ほどからゲイリーに言われたことが気になっていた。

「……何とも言えないかな。確かにやり過ぎな部分もある、彼はシムジウ

プライドも《杖》も粉々に砕かれてもしかしたらもう立ち上がれないかもしれないし……」

(……結局俺は『牙折り』のままなのか?)

「でも、それでも僕はキミに感謝しているよ。だからもう一度言うよ、ありがとう。」

「そっか……」

(少しは変れたんだろうか?)

二人はそのまま寮に向かって歩き続けた。

――――

二人が『火の学生寮』に着く頃には日は完全に沈み暗くなっていた。

「なんか…… やたらと視線を感じたんだが。」

「既に噂になってるみたいだね。」

道中にいる学生達は二人に視線を向けてヒソヒソ話し合っている

「まあ、学園開始の初日から決闘なんてしたからしょうがないか。」

ゼノが寮のロビーに着くと見覚えのある夕焼けよりも紅い髪の少女

がまっすぐに目を向けていた。

「じゃあ僕は先に部屋に戻ってるよ。」
マルクは気を効かせてその場を離れた。

「ねえ、ゼノ」

サラは何かを決心した様子で話しかけた。

「よかったら少し付き合ってくれる？」

寮の外に出た二人は人の歩みがなくなった大通りを並んで歩いていた。

「それで、何の用？」

ゼノが聞くと

「そのさ…… ま、まだちゃんと会話をしてないなーって思ったから」

「そっか…そうだね。昔はもっとたくさん会話をしてたもんね」

「それでさ、聞きたいんだけど… ゼノは剣術を諦めた後どうして

たの？ ほら、さっき闘技場で剣を素手で碎いてたから気になっ
たさ。」

「あの後、さすがにショックで二週間程落ち込んでたら、父さんに
……あつ、伯父さんのことね。」

ゼノは昔を思い出しながら話し始めた

「父さんに、『何時まで落ち込んでるつもりだ馬鹿野郎！』って怒
鳴られてさ、その後に『お前は不器用だから道具を扱うのに向いて
いない、だからオレがケンカの仕方を教えてやる！』って言われた
んだ。」

「何かメチャクチャな人だね。」

「ホントにね。それからいろんな人に鍛えられ続けてたらある日、
父さんの知り合いに『よかったら俺が徒手格闘術を教えてやる』っ
て言ってくれたから始めてみたんだ。」

「じゃあやつぱりゼノはあの時の約束を守ってくれたんだ。」
話を聞き終えたサラがそう呟いた。

「え？でも俺は剣術を諦め——」
「わたし達が約束したのは、剣術家、じゃなくて、けんし、でしょ、
だったら、拳士、でもいいじゃない？」

「でも『会いに来て』の方は——」
「さっきわたしがロビーで待ってたら会いに来てくれた！」サラは
間髪入れずに言いきった

「……ヘリクツじゃないかそれ？」

「だからどうしたの？」

あなたは約束を守ってくれたわ！

わたしが断言してあげる！」

そう言ってサラは微笑んだ。

「――ぷっ、ははははは……」

ゼノもつられて笑った。

こうして二人が交わした約束は五年間の時を経てはたされた。

14話 約束の行方（後書き）

次回からは更新ペースが遅くなるかもしれませんがよろしくお願ひします。

15話 クエスト準備

新学期開始から4日が経過した。

ほとんどの高等部一年生にとって初めての冒険者ギルドへのクエストを翌日に控えたこの日、1-Dではペア決めが行われていた。

「それじゃあ、適当に好きな人とペアを作ってちょうだい。」
と担任のマオ・フェイ先生、現在32歳ペア無し（独身）が指示を出した。

「なんかバカにされたような……」

（side…サラ）

ペア決めか、やっぱりここは無難にナズナちゃんと組もうかしら――

「ねえサラちゃん、ゼノくんとは組まないの？」

と思ってたらくんでもないこと言ってきたこの子！！

「ちよっ……そんないきなり……」

「でもチャンスじゃない！ この前やっと顔を見て話せるようになったんだから！」

そ、そんなこと言ったって……でも確かにこれはチャンスかも……
……？

「わ、わかったわ……」

わたしは深呼吸をして――

「ゼ「なあマルク！ペア組まないか？」……………あれ？」

……………どうやらゼノは近くの席にいたこの間の男の子とペアを組んだみたい……………

「……………ナズナちゃん……………ペアお願い……」

「……………ごめん……………私のせいで……」

（side out）

40分後

「それじゃあ、みなさんペアは決まったわね！」

ちなみにこの第一魔法学園高等部は1学年500人で5クラス、つまり1クラスあたり100人もいるため、こういう時は非常に時間がかかるのである。

「じゃあ、ペア同士で明日と明後日に受注するクエストを話し合っ
といてちょうだい。」

と言って教室を出ていこうとしたマオ、しかし途中で立ち止まり――
「言い忘れたけど2日間で最低5つクエストをクリアしないと補習だから頑張ってね♪」

――爆弾を投下して去って行った。

「「「ざっけんなー！ー！！!?」」」」

クラスの大半の生徒がシャウトした。

side..ゼノ

オイオイ…… 随分とまあ無茶苦茶言うな。

「2日でクエスト5個で……」

「やっぱりゼノでも難しいの？」
とマルクが聞いてきた。

「誰でも難しいと思うぞ……まず時間が足りないし……」

しかもほとんどの生徒が今回始めてクエストを受けるはず……

「まあいいや、それよりこれからギルドに行こうか。」

「え？一年生は明日からじゃないと受注出来ないんじゃないかなかった？」

「確認するだけさ、何を受けるか実際に見ておくほうがいいと思う。」

「なるほど……一理あるか。」

けど、その前に――

「おーい、サラ！」

「……えっ？」

何か惚けてなかったか？

「これからギルドに寄ろうかと思うんだけど……一緒にどうだ？」

「!?!?……行く!もちろん行く!」

「お、おお……そんじゃあ、イスルギさんも誘って4人で行くか。」
それに気になることも有るしな……

＼side out＼

「じゃあ、さっそく行こう。」

「ちよっと待って。」

とナズナが止めた。

「どうかした？　イスルギさん。」

「ナズナでいいよ。」

「じゃあナズナ」

「（いきなり呼び捨て……）その、わざわざギルドまで行かなくても学園の敷地内に学生用の出張所があるからクエストの確認はそこで出来るよ。」

「え、マジで？」

ということで一行は学内にあるギルド出張所へ向かった。

「で？見た感じどうなの？」

クエストのリストに一通り目を通したのでサラがゼノに訪ねてきた

「そうだな…… まず確認しとくけど、今回の課題はペアでクエスト、5個、だよな？」 「ええ、たしかそうよ。それがどうかした？」

と、そこでゼノ少し考えた後に一同に告げた。

「よし！そんなじゃ明日は4人でクエストを受けよう！」
「「はい！？」」「」

16話 クエスト前に

週末の二連休の一日目早朝、ゼノ達4人はさっそく寮のロビーに集まっていた。

「ねえゼノ……何もこんな時間に集まなくても……ふぁ〜」

とサラが欠伸をしながら訪ねた

現在日の出前、外はまだ薄暗い
しかし――

「昨日確認したところ採取クエストの種類が少なかったんだ。」
とゼノは告げた。

「えっと、どういうこと？」

「つまり取り合いになるってこと」

「取り合い？ でも採取クエストは常時受注可能の筈だけど？」
今度はマルクが訪ねた

「確かにクエスト自体に制限はない……けど採取対象には数に限りがあるからね。」

「そっか学年で250組もペアがいるからすぐに無くなっちゃうのか！」

「さらに今回の課題に『複数のペアが協力してはいけない』なんてルールは無いから4人でこなせば少し楽になるってわけ。」

「そっか！それなら時間を短縮できるもんね！」

「でも何で採取にこだわるんですか？」
ナズナが問いかける

「今回の課題はクエスト‘5種類’ではなく‘5個’、つまり同じクエストでも可能、ここまではいいよね？」

ナズナは頷いた

「そうなると採取だったら一回でノルマの二倍以上取れたらクエストを2個達成したことになるんだ。」

「あれ？でも結局2チーム分採取しなくちゃいけないならメリットは少ないんじゃない？」

「いや、実はそうでも無いんだ。例えば二人で採取に行った場合、一人が限界まで採取するともう一人だけで魔物の対処をしなくちゃならないから大変なんだ。でも四人いれば先頭と最後尾で一人ずつ対処が出来るから魔物と遭遇した時もやりやすくなる。しかも運ぶ人も二人に増えるから袋に入れたりしてより多く運べるしね。」

「なるほど、確かに集めすぎると持ち運びが難しくなるもんね。」

「でも一番の理由は、さっき言ったように後半になると採取は難しくなる、だから何れ討伐クエストを受けないといけないようになるんだ…その時四人いたほうがやり易いってところかな。」

「「へえ…。」」

ゼノの説明を聞いた三人は関心しながら声をもらした。

……今の長ったらしい説明を読み飛ばした読者は何人いるやら……

閑話休題

（本当は他のペアの盗難防止の目的も有るけど、初クエストで不安にさせすぎるのも良くないか……）
ゼノは声に出さずそう思った。

――――

4人は日の出前に学内ギルド出張所（めんどいから次から学内支部で）へ到着した。

支部内にはやはりほとんど人がいなかった。

が、一人の男が一行を確認した途端に走り寄ってきた。

「えっ、誰あの人？」

「！！！？――あれはまさか！？」

例によってゼノだけは心当たりがあった。

「おーい！もしかしてオマエ『牙』か！？」

近づいて来るなりバスターソードを背負った男がそう叫んだ。

「はぁ、やっぱお前かよ『角』。」

ゼノはため息混じりにそう答えた

おいてけぼりの三人はポカンとしていた。

「ねえゼノ、この人知り合い？」

三人を代表してサラが疑問を投げ掛けた。

「おっ！もしかしてその子が例のムグツ―」

「余計なことは言わんでいい……それより、何か用かロラン？」

「ロラン？ それって二年生の『剣角』のロラン先輩！？」

と二人のやり取りを聞いていたナズナが呟いた。

「『剣角』？ それって学年上位の実力者って噂の？」

「プハッ！――そういう君は期待の新人の『紅嵐』のサンドラだろ？」

「コウラン？ 何だソレ？」

とゼノが訪ねた

「サラちゃんの二つ名のことよ。」

ナズナが答えた

「水、樹、雷の三つの属性と紅い髪の毛からそう呼ばれてるのよ。」

「なるほど、同時に雨、風、雷が飛んでくるから嵐か。」

ゼノは納得したように頷いた

「で、話を戻すけどお前は何しに来たんだ罗兰」

「ひでー物言いだなあ、せっかくの一年ぶりの再会なのによ。てか一応オレは先輩なのにタメ口かよ。」

「今更お前に敬語は使いたくない。」

「なあゼノ、罗兰先輩とはどういう知り合いなんだ？」

「私も聞きたい。」

マルクとナズナの質問に答えたのは罗兰だった

「オレとコイツ（ゼノ）とあともう一人で去年までパーティ組んだんだ。」

「つつても一年間だけな。」

約一年前に罗兰ともう一人が学園に編入したため解散したそうだ。

「で、いい加減何でこんなところにいたのか教えろよ。ここのクエストはレベル2までしかないから本来お前がわざわざ、しかもこんな時間に来ているのはおかしい。」

「オマエに忠告しておくためだ。」

「忠告？」

「オマエが新学期早々やらかしたせいで――」

「周りに目をつけられた…か？」

「それもあるが『爪』の奴が探してる……せいぜい気をつけろ。」
罗兰は忠告した

「あの規則馬鹿がか？」 「ああ、何せ無許可の決闘だったからな。ただ『爪』よりもアイツのほうが御冠だったけどな。」

「ヤレヤレだ……………」

「ねえゼノ、さっきから角とか爪とかって何の話なの？」
サラが疑問を投げ掛けた

「俺達がパーティを組んでた時の呼び名だよ。」

「オレが『剣角』だから角、もう一人が『雷爪』だから爪だ。」

「じゃあ、ゼノは何で牙なの？」

「それは……………」

「？」

ゼノがどもったのでロランが後を引き継いだ

「元々『牙折り』と呼ばれてたから牙にしたんだよ。」

「牙折り？何なのそれ？」

「ああそりゃあ——」

「ロラン——！」

ゼノがロランに怒鳴った

「わ、わりい……………」

「…いや、こっちも怒鳴って悪かった。」

「すまないがサラ、その話はまた何れ……………」

「わ、わかった……………」

「じゃあ、悪いけどそろそろ行くわ。」

「おう、引き留めて悪かったな。」

そう言うところランは出口の方へ向かって行った。

「……その、ごめんねゼノ」

「いや、此方こそ……ただ『牙折り』はとっくに捨てた名前だから……」

それから一行はとくに会話もなくクエストを受注しに受付に向かった。

17話 クエスト開始

「ところで、今のうちに全員のギルドクラスを確認しとかないか？」
クエストを受注し終わり、王都の西側に広がる草原を歩きながらゼノが唐突に提案した。

「確かに確認しておいて損はないかもね。」
と言ってサラがギルドカードを差し出した

「どれどれ……『ウィザード』か、『杖』はその長杖だね。ナズナとマルクは？」

「私も『ウィザード』よ。『杖』は短杖」

「僕は『シューター』だよ。『杖』はこれだよ。」

そう言ってマルクは懷から自分の『杖』を取り出した。

「何これ？」

「もしかして銃か？」

それは一丁の拳銃だった。

「その通り。僕は魔力の総量が少ないから、遠距離の魔法限定だけど魔力消費が少ない銃は打ってつけてわけ。」

実はマルクの魔力総量は平均の7割程度しかない、そのため中等部に入れなかった。

「でも魔力の量なら修行しだいで増やせるぞ。」

「それでも一般に知られている修行法なら試してみただけだね。」
魔力は適正属性と違い増やすことは可能だが、普通は爆発的に増える物では無いのだ

「かわりに『熱感知』の魔法みたいに消費魔力の少ない熱魔法は得意だから索敵は任せてくれ。」

「ところでゼノくんのクラスは何なの？」

「ああ、まだ見せてなかったね。ホラ」

ゼノはギルドカードを三人に見せた。

そこにはこう書かれていた

———

名前…ゼノ・アルフレイン

ギルドクラス…ビースト

レベル…4

———

「何これ？」

「ビースト？」

「えっと、ゼノくんの《杖》はその短剣じゃないんですか？」

ナズナはゼノが腰に携えているナイフを指差しながら聞いてみた。ちなみにナイフなどの短剣を《杖》として使用する冒険者のクラスは本来なら『レンジャー』と呼ばれるのである。

「いやコレはただのサバイバル道具だよ。必需品ではあるけどね。」

ビーストってのは特殊クラスの一つなんだ。」

特殊クラスとは、使用する《杖》がギルドが定めたクラスの対象外である冒険者に与えられるギルドクラスのことである。

余談だがこれがあるせいで今までゼノのカードを見たギルド関係者や冒険者に詳しい者達には彼が『牙折り』の二つ名であったことがバレていたのである。

「俺は《杖》を使わずに素手で戦うからクラスが、獣、になったらしい。」

「ちょっと待って！今とんでもないことを言わなかった！？」

「素手って言ったように聞こえたんだけど！」

マルクとナズナは驚いたがサラは冷静に疑問を口にした。

「ねえ、ゼノが徒手格闘を使うのはこの前聞いたけど何で籠手を使わないの？」

「それは俺には必要ないからだよ。正確には使うと逆効果になるんだ。」

「どういうこと？」

「まあ、何れ解るよ。」

そう言ってゼノははぐらかした。

「それより、そろそろ森に着くぞ。」

一行はいつの間にか王都の西に4kmの地点にある名も無い森の入口に着いていた。

「とりあえずクエストを確認しよう。」

「……まあいいわ。わたし達は『葉草を5束採取』と『大猪を1

頭討伐』よ。」

「僕達は『水茸を5本採取』と同じく『大猪を1頭討伐』だね。」

「でもゼノくん、何で大猪の討伐を受注したんですか？採取だけでも時間がかかるのに。」

ゼノは受付でクエストを受注する直前に当初の予定に無かった討伐クエストを追加していたのだ。

「それは水茸は大猪が好んでよく食べるからだよ。だから採取に時間をかけていたらほぼ確実に現れるからついでにね。」

つまり、どうせ戦うことになるから殺っちまおうぜ♪ ということである。

「とりあえずノルマは薬草10束と水茸10本でそれ以上は余裕があればその時に、って感じで行こう。」

「「了解！」」

この時三人は気付いてなかった。

ギルドクラス以外にギルドカードに記載されたゼノの異常性に……

———

「あった！これでコッチのノルマはとりあえず達成したわよ。」

「了解！ 俺達の方もこれでノルマ達成だ。」

森に入って5時間が経過した。既に太陽はほぼ真上から大地を照らしていた。

「マルク、辺りに魔物はあるか？」

「とりあえず近くにはいないみたい。」

「わかった。じゃあ皆、一旦休憩にしよう。」

「了解、じゃあナズナさんお願いします」

「任せてマルクくん。『大地よ』」

ナズナの魔法によって地面が盛上り、石で出来たカマクラが完成した。

「すごいな、同じ基礎魔法の『石造り』なのに俺のとは比べ物にならない……」

とゼノが感嘆の声を漏らした

「それでも一応地属性だから……」

ナズナは照れながらそう返した。

「さて、そろそろ他の生徒も増える頃だと思っただけ…」
一行がクエストを開始してからまだほとんど他の生徒を見かけていなかった。ゼノが不思議そうに呟いた。

「あのねえ、初めてのクエストでこんな森の奥深くまで探索する生徒なんかいないわよ。」

「えっ？」

「ゼノくんは慣れているみたいだけど…」

「正直僕達もゼノの言うとおり4人で行動してなかったらとてもじゃないけど……」

数年間のクエスト経験のあるゼノと違い、今回が初クエストの3人にとっては十分にハイペースであった。

「ごめん、気づかなかった……」

「気にしないの！ホラ、ゼノのお蔭で既にクエスト二つはクリアしたも同然なんだから！」

「そうよ！それにゼノくんがいなかったら今回の課題はクリア出来ないだろうし。」

サラとナズナはそう言ったがゼノは浮かない顔をしていた。

その時――

「これは！？」

「どうしたマルク？」

「大きめの熱源が2つ近づいて来た！距離は200メートル！」

「来たか！」

「よし！行きましたよ！」

勢いよく飛び出したゼノとサラ
対してナズナとマルクは

「ちょ、ちょっと怖いかも…」

「実は僕も…」

カマクラから飛び出した一堂、そこで――

「なっ！？熱源が増えた！」

「方向と数は？」

「数は一頭だけど方向はさっきの二頭の反対側から近づいて来てる
！」

それを聞いたゼノは少し考えた後

「じゃあ、俺が二頭引き受けるから3人は残りの一頭を頼む。」

「なっ！！ちょっとゼノ、本気で言ってるの！？」

「大丈夫だ。大猪はクローゼ村にいた頃に何度も狩った獲物だから。
」

狼狽えるサラに対してゼノは平然と言い放った。

「対処法はさっき教えたよね。たぶん大丈夫だと思うけど何かあったら直ぐに呼んでくれ。

それに一回は戦闘を経験しておいた方が今後のためになると思うから頑張れ。」

そう言ってゼノは二頭がいる方向に走っていった。

「…ゼノくんの心配をしてたのに」

「逆に心配されるとはね…」

ナズナとサラは苦笑いするしかなかった
ガサッ

「来るよ！」

「は、はい！」

「戦闘開始ね！」

三人は《杖》を取り出し身構えた。

18話 討伐

サラ達三人が身構えると同時に正面から全長2、3メートルの猪が飛び出してきた。

「ナズナちゃんお願い！」

「うん！『捕らえる土の腕、アースハンド』」

ナズナは地の初級魔法を発動した

大猪の真横の地面から、土で構成された巨大な腕が大猪を捕らえようと伸びる

「フギイイイ！！」

大猪は鳴き声をあげると同時に真横に方向転換して迫り来る土の腕に突撃して蹴散らした

「よし！ナズナちゃんは下がってて、作戦通りをお願い！」

「わかった！」

「次は僕達の番だね！」

ナズナと入れ替わってサラとマルクが前に出た

「マルク君、時間稼ぎよろしく！」

そう言ってサラは雷の魔力を練り上げ始めた。

「わかった！『アクアバレット』」

マルクは『水弾』を大猪の横面目掛けて撃ち込んだ

「フギイ！！」

大猪は攻撃をまともに食らったが、一鳴きするだけでほとんどダメージを受けていないようだった

そして大猪はマルクの方に向き直って突進してきた

「くらえ！『ミストストリーム』」

マルクは正面から突撃してくる大猪に『濃霧』を放った。

大猪は霧が飛んでくるとさらに加速して真っ直ぐに突っ込んだ
大猪の注意が霧に向いている隙にマルクは横飛びで進路上から逃れた

（ゼノの言った通りだ。）

マルクは森に入って直ぐにゼノに言われたことを思い出していた

~~~~~

「そういえば、皆狩りの経験はあるの？」

「今更それを聞くの？……わたしは無いわ。」

「僕も」

「私も」

「じゃあ、大猪と戦う時の注意点を教えておくよ。」

ゼノが言うに、注意点は三つ

一つ、大猪は自分の頭と牙の硬度に自信を持っている、そのため自分に向かって飛び込んで来る物には必ず正面からぶつかってくる

二つ、攻撃方法は突進のみ

三つ、大猪は腹部が柔らかいためそこを狙え

「あとは基本的な事だけど森の中では必中の時以外は火を使わないこと、火事になったら大変だしね。」

~~~~~

「ていうか、ただでさえ僕は攻撃力が低いのに火属性を使えないのが辛い！」

愚痴りながらも上手く間合いをとって『水弾』を大猪の全身にまんべんなく撃ち込むマルク

しかし、大猪はそれを意に介さずに真っ直ぐに突っ込んでくる。

「やらせません！『ストーンシルド』」

それを阻むためにナズナが地属性の基礎魔法『石盾』を発動したこれは『石造り』の魔法よりも発動が速く丈夫な防御魔法だ

『石盾』に大猪が凄まじい音をたてて衝突した

衝突によって大猪の突進は止まったが、盾に大きな亀裂がいくつも走った

しかしその一瞬の隙をサラは見逃さなかった

「とどめよ！『降り注げ、天空の怒り！サンダーボルト！』」

サラは練り上げた雷の魔力を開放して中級魔法の『落雷』を発動した

瞬間、轟音と共に目が眩む様な雷が大猪の脳天を貫いた

そして――

ズーン！！

大猪が横向きに倒れた

大猪は感電してピクピク動くのがやっとのようだ

「ふー、作戦成功ね。」

サラが汗を拭いながらそう言った

作戦とは実にシンプルで

マルクが敵の注意を引き付けながら水弾で相手を濡らして

ナズナが防御魔法で相手の攻撃を一瞬でも止めて

サラが渾身の雷魔法を叩き込む

それだけである

「僕だけあんまり役に立てなかった気がする…」

「そんなことないです！マルクくんが注意を引き付けてくれたお蔭です！」

落ち込むマルクとそれを慰めるナズナ

そこへ――

「そうそう、それにマルクが相手を水浸しにしたおかげでサラも雷を精度を気にせず射てたんだし。」

「そうよ、わたしの『サンダーボルト』は命中率がわる……」

「ん？どうした？」

「「「……………」」」

いつの間にか当然のように会話に参加していた灰色頭に三人は啞然としていた。

「まあ、まだまだ無駄な動きもあったけど初めてにしては上出来だ！」

「……………あ……………え？」

「な……な、な……！」

「ちょ、ちよつと何でゼノがここにいるの!？」
それぞれ驚きの声をあげる三人

「ん? いや、速攻で終わらせたから様子を見に来たんだ。具体的にはマルクが回想シーンに突入してる途中から。」

「いや、何の話し!？」
すかさずツツコミを入れるマルク

「あのそれで大猪は? 二頭いたはずでは?」

「ああ、そこに有るけど」
ゼノが指差した方向を見るとそこには背骨が変な方向に折れ曲がって絶命している二頭の大猪が転がっていた

「うそ……」
「わたし達はあるなりに苦勞してやっと一頭倒しただけなのに……」

「……どうやって倒したんだ?」
「突進をギリギリで回避して背中に全力で手刀を叩き込んだ。それより、さっさとコイツの牙を採取しよう。」

「あ、うん……」
討伐クエストでは倒した相手の指定部分をギルドに提出することで達成となる。

……ベタだって? 別に良いじゃない、人間だもの

「採取が終わったら飯にしよう。」

「……そうね。言われてみれば朝から何も食べてなかったわ」

「ちょうど肉も手に入ったことだし」

「「「えっ!!?」」」

先ほどより驚愕する三人であった。

二十分後

「よし、焼けたぞ。」

「「「……」」」

「どうした？食わないのか？」

俯いて黙り込んでいる三人にゼノが大猪の肉に食らい付きながら聞いた

「……いやだって、コレさっきまで生きていたやつだし…」

「それに目の前であんなのを見せられたら……」

「ちよっと食欲が……」

先ほどゼノが行なった‘大猪解体ショー’を見せられた三人はすっかり食欲を無くしていた

「まあアレだ！騙されたと思って食ってみろって！」

しかし、ゼノは三人の手に半ば無理矢理肉を握らせた

三人はしぶしぶそれを口に入れた

「!!」

「これは!」

「おかわり!」 「早いなオイ!」

|||||

「でもちよつとショックかな」

食事の最中にサラがふと呟いた。

「たったのレベル1のクエストなのにあんなに苦戦したなんて…

…」

「う、たしかに…」

「ゼノくんなんてあっさり倒していたのに…」

「いや、だって三人共初めてだったんだろ? 俺の時よりずつ

とスゴいよ。」

落ち込みはじめた三人にゼノがそう言った

「俺なんて大猪の突進をまともにくらって死にかけてたからな。」

「ゼノが? 信じられない…」

「それに比べたら、マルクは無傷で突進を避けてたし、ナズナは突進を止めた、それにサラは一撃で仕留めた、全部俺には出来なかったことだ。だから自信を持て!」

ゼノは三人の眼を見据えてハッキリといい放った

――――

「そ、それでは……2ペアともに四つクエストを完了と成ります：：」

四人は食事を終えて、その後葉草を5束採取して支部に帰って来たそして現在報告を終えたところなのだが……

（「ね、ねえ受付の人顔がひきつってない？」）

実は大猪の討伐はレベル1クエストの中でも限りなくレベル2に近い難易度の為、間違っても初クエストでこなす依頼ではないのである

「それでは、またのご利用を……」

ちなみにこの事実を翌日知った三人にゼノがこっぴどく怒られたのは言うまでもない。

18話 討伐（後書き）

ヤベ〜

オチがいまいちだ・・・

え、全体的にいまいちだって？

19話 一難去って…

「困ったわね…」

職員室の自分の机で1-Dの担任のマオは一人呟いた。
原因は先週末に出した課題の結果についてである。

「まさかあの無茶な課題をクリアする生徒がいるなんて……しかも二組も」

本来なら、今回の課題は一年生に高等部の厳しさを実感させるための「洗礼」でありクリア出来ないのが前提であったのだが

「初日から討伐クエストなんて受けないでしょ普通…」

ゼノの無茶によって初日にクエストを4つこなした二組は、翌日に楽々とクエストをこなして、みごと課題をクリアしていた。

「仕方ない……こうなったら……」

~~~~~

side..ゼノ

気まずい……昨日から三人共眼を合わせてくれない

「あのゝそろそろ機嫌治して欲しいんですけど…」  
「……」

シカトですか…

「ほら、無事に課題も終わったんだから」

「ねえゼノ」

「何でしょうかサラさん……いや、サラ様」

「何で自分が怒られたのか理解はしているのかしら？」

「…初日から難易度高めの依頼を受けたから？」

「その通りよ！ 何であんなセオリ―無視をしたの！？」

やっぱ普通じゃなかったのか……

「いや、その俺の時も最初に大猪の討伐を受けたから…つい」

「それでどうなったんだっけ？」

「……大猪に撥ね飛ばされました。」

「何でそんな危険な任務受けたの！」

…そんなこと言っちゃって

「いや、でも修行時代はもっと危険なクエストをガンガン受けてたから」

「だから？」

「感覚が麻痺してました…」

だってあの頃は毎日死ぬ寸前までシゴカレてたからな…リアルに

「サラちゃん、そろそろ許してあげなよ。」

「そうだよ、結果的には問題なかったんだから。」

サラがジト目で俺を睨んでたら横から二人が庇ってくれた。

「ハァ…まあ二人がそう言うなら今回は…」

あれ？そこで悩むの？

「今日の放課後に買い物に付き合ってくれたら許してあげる。」

「わ、わかった付き合うよ！」

よくわからんけど機嫌が治るならお安いご用だ。

「……付き合う………えへへ………」

「何か言った？」

「別に、何も！！！」

まあいいや

「じゃあ今日の放課後に——」

「そこの四名ちよつといいかしら？」

せっかく話が纏まりかけたのに横から年増が割り込んできた。

「今何か失礼なことと思ってなかったかしら？」

「イイエ、ZENZEN思っていないですよ先生。」

勘のいい独身だな…

「何か腹立つけどまいいわ。　あなた達四人には放課後に生徒会室に集まってもらいます。」

はい？

「理由はその時に直接お話しします、では！」

それだけ告げると年増は何処かに去っていった

俺はそーつと横を見てみた

『ジーーーー………』

そこにはせつかく治りかけた機嫌を害したサラが俺を睨んでいた……勘弁してくれ！

＼side out＼

—————

放課後、四人は言われた通り生徒会室の前に来ていた。

「てか、生徒会って何？」

予備知識の無いゼノが呟く

「簡単に説明すると、生徒による学園の管理組織よ。」

「管理って具体的には何してんの？」

サラの説明に新たに疑問を口にするゼノ

「主に規則違反者の取締りですよ。」

今度はナズナが答えた

「なるほど、つまり規則馬鹿の巣窟ってわけか。」

「規則馬鹿で…」

「三人共、そろそろ入ろう」

マルクに急かされて生徒会室に入る一行、部屋の中には担任のマオと生徒会の役員らしき生徒が一人いた

「よく来たわね…それじゃ早速何故あなた達を呼び出したかなんだけど…：…あなた達には補習の代わりに生徒会の仕事を手伝ってもらいます！」

「「「はぁ!？」」「」」

「実はこの前の課題は不合格が前提の物だったのよ。」

「いや、意味がわからないんですけど！」

「チッ…：…要するに今他の生徒が行っている補習は本来一年生全員が受けなければいけない必修内容なのよ♪」

「だから？」

「カツ、ペツ!…：…つまりあなた達にも受けてもらわないといけない内容なの♪

でもせっかくクリアしたのに補習じゃ他の生徒も騙されたと思うじゃない？」

だから代わりに別の物を受けて貰うってわけ♪」

「『つてわけ♪』じゃねえだろ!てかチヨイチヨイ態度が悪くなるのは何なの!？」

たまらずツツコミを入れるゼノ

「じゃあ詳しい内容はその人に聞いてね。先生はこれから用事があるから、じゃあね！……キャッホー♪」  
そう言い残してマオは去っていった

「……あのアマ、絶対合コンに行く気だ…」

「うん…」

「でしようね…」

「だね…」

「コホン、 それでは君達には実際に生徒会の仕事をてつだっても  
らいます。」

「具体的に何をすればいいんですか？」

「今日のところは仕事の見学です。」

実際に仕事を手伝ってもらうのは明日からになります。  
それでは、まずは自己紹介から 私は三年のトレア・ホン、副会長  
よ」

役員が挨拶してきたので四人もそれぞれかえした。

「あら、貴方が噂のアルフレイン？」

「…どんな噂ですか？」

ゼノは例によって嫌な予感がしていた

「そうねえ、新学期早々に決闘を行ったとか…」

「それは相手にも原因が…」

「ギルドで酔っぱらいと喧嘩したとか…」

「それは不可抗力で…」

「あとは、ルームメイトと愛人関係になって「初耳だよ！…」ってか  
誰だそんな噂流したヤツ！」…それは残念ね。」

「ゼエゼエ：ほ、他には？」

ツツコミ過ぎて息切れするゼノ

「あとは、後輩からよく話を聞くわね。」

「後輩？」

「ええ、二年生の男子よ。生徒会に所属してるからいずれ会えると思うわ。」

「それでは改めて今日の予定を説明させていただきます。」  
仕事モードに戻ったトレア

「もうすぐ見回りから役員が一旦戻ると思うので、その人達に着いていってください。その後は終わりしだいその場で解散となります。」

坦々と説明を終えるトレア、そこへ――

ガチャ――

ちょうど役員が入って来た

｛side…??？?｝

やれやれ、フェイ先生にも困ったものだ：

最初から補習なんて言わずに素直に必修だと言っていれば、こんなややこしい事には成らなかったのに。

でも、おかげであの大馬鹿に説教出来るのだから

ガチャ――



いた、間違いなくあいつだ……

「只今戻りました副会長」

「ご苦労様です。」

「それから――」

変わってないな、あいかわらず灰色髪だな

「久しぶりだな、大馬鹿<sup>ゼノ</sup>野郎」

## 20話 仕事初日

「前回までのあらすじ

担任の年増<sup>マオ</sup>先生のチョンボのせいで何故か生徒会の仕事を手伝うことになった俺達

そこで副会長から説明を受けている最中に陰険なクソ眼鏡が乱入してきた」

「誰がクソ眼鏡だ、それからいきなり意味不明な事を言うな」

生徒会室に入って来た役員がローテンションでツツコんだ

「久しぶりだなシグ」

「何事もなかったかの様に…」

「ゼノくん、この人は？」

二人のやり取りを見ていたナズナが聞いた

「この前話した『元パーティーメンバー』の『雷爪』だよ。」

「今は『雷槍』だがな、っと自己紹介がまだだったな…はじめまして、生徒会二年庶務のシグマ・ラゲイルだ。」

「それじゃあラゲイルさん、その一年生達を宜しく。」

「自分一人ですか？」

「ええ、今日は見学だけですから。それに貴方にしか任せられない理由もあるのよ…」

「……了解した」

シグマはしぶしぶ頷いた

「それじゃあ一年、これからもう一度見回りに行くからついてこい」

「…お前相変わらずだな」

シグマの無愛想な掛け声にゼノは呆れたように呟いた。

「あの、質問してもよろしいですか？」

マルクが控えめに聞いた

「何だ？」

「今回の手伝いは補習の代わりだと伺ったんですが、生徒会の仕事と関係があるんですか？」

「それ私も気になってました。」

「…恐らく直接は関係無いな、だが仕事をしていたら自然に補習内容も身につくはずだ。」

「どういう事だ？」

「そうだな、ゼノ（馬鹿）でもわかるように説明すると――」

「オイコラ、人の名前を馬鹿と読むな！」

「――この時期の生徒会の仕事は見回りぐらいしかない、よって補習内容はそれに類似した物の筈だ。ところでこの前の課題で最も多く受注されたクエストは何だと思う？」

ゼノの抗議をシカトしてシグマは三人に訪ねた。

「採取ですか？」

「その通りだ…何て名前だっけか？」

「あ、はいサンドラ・ルミールです。」

「サラ、コイツに敬語は不要だ。」

「えっ？でも先輩でしょ？」

「ほう、まさかあの入学組の『紅嵐』が例のあの子だったのか。」

二人のやり取りを見てたシグマが感嘆の声をあげた。

「何ですか、その例の子って？」

「ああ、昔ゼノが話してた幼なじみだろ？」

「シグ、それよりさっさと続きを話せ。」

話が脱線しかけたのでゼノが遮った

「…まあいいだろう。それでさっきの続きだが採取が一番多かったんだが…その採取で重要になるのは何だか分かるか？」

「何だ？」

「…少しは考えろよ大馬鹿<sup>ゼノ</sup>」

「喧しい規則馬鹿」

「正解は、探す能力、だ」

「まんまだな」

「黙れカス」

「…あの、具体的にいうとどういうことですか？」

軽口を言い合っている二人に割り込む様にナズナが訪ねた

「具体的には物を探す集中力と周りに対する注意力だ。そして補習では毎年それらの能力を向上させる為に学園の敷地内にある野外演習場でひたすら物探しをさせられる。」

学園の敷地内には軽く遭難できるんじゃないか？というぐらいの広さを誇る雑木林があり、野外演習場として活用されている。

「見回りでも落とし物や規則違反者を捜す必要があるから必然的に能力が身につく。そのため補習の代わりには打ってつけたと考えたんだろう。」

それじゃあ今度こそ出発するぞ。あと、そこの大馬鹿<sup>ゼノ</sup>には終わった話があるから覚悟しておけ。」

「ゲッ！」

理由はどうあれ規則違反の決闘を行った為、勿論ゼノはシグマの説教対象に成っていた。

――――

一行は現在、高等部校舎の4階の一年生の教室棟で見回りを行っていた。

既にシグマが殆ど見終わっていたため今日のところはこのフロアが終れば解散である。

「しかし全然人がいないね。」

「やっぱりみんな補習中なのかな？」

現在一年生は演習場にいるため作業開始からまったく人とすれ違わない

「とりあえず落とし物があつたら拾っておけ。毎回一つはあるはずだ。何しろ生徒数が多いからな。」

「そういえば、さっきから他の役員にも遭遇しないけど何人で見回りしてるんだ？」

「生徒会の人数は全部で十人、その内見回りは庶務五人の仕事だ。」  
ちなみに残りの五人は会長と副会長、そして会計が一人ずつ、書記が二人となっている。

「たった五人しかいないのに固まって動くわけ無いだろう。」

「じゃあお前の担当はどこなんだ？」

「俺の担当は高等部校舎の三、四階の一、二年生の教室棟だ。」  
見回りの対象は他に三年生の教室付近、一階昇降口、そして各階の実験棟である。

「今日はほとんど終わったから一通り回ったら終わりなんだが、気を抜くなよ。」

「何で？」

「たまに闇討ちしてくるアホがいるからな。」

「さらっととんでもない事言うな！」

「安心しろお前に対してだから」

「更に不安なんだけど！てか誰だ！」

「アイツに決まってるだろ。」

（「ねえ、さっきから思ってたけどあの二人って仲悪いの？」）

（「少なくとも仲良しではなさそうね。」）

すっかり蚊帳の外に放り出された三人はよく分からない表情で二人を見ているだけだった。

「アイツならやりかねないな……ってか俺が何したよ？」

「勿論何もしていない。」

王都に着いて一週間以上たったのに……だ。」

つまり彼等の言うアイツはゼノがまったくの音沙汰なしなのが気に入らないのだ。

「せいぜい気を付けろ。」

「おう……」

ゼノは力なく頷いた

――――

　　40分後

「まあ今日はこの位にしとくか。明日からは本格的に仕事をしてもらうからな。」

「終わった」

「じゃあこれから皆でどっか行きませんか？」

「賛成！」

「俺も！」

上からマルク、ナズナ、サラ、ゼノの順番である

「オイ待てそのウスラ馬鹿、お前は此方だ。」

シグマはさらっと逃げようとしたゼノの襟首を掴んで引きずっていった

『貴様にはタップリと言いたいことがあるからな』

『さて！決闘の件はこの前先生から注意を受けたぞ！』

『黙れ、逝くぞ』

『字が違アアアアアアア…』

そして誰もいなくなった。

「…帰ろうか」

「うん」

「行きましょう」

残りの三人は今のやり取りを見なかったことにして帰路についた

ちなみにゼノはこの後三時間ぶっ通しで説教を受けるはめになった。



## 20話 仕事初日（後書き）

＼水の学生寮・ロビー＼

＼side…シグマ＼

やれやれ、あの馬鹿のせいで遅くなったな。

「あれ？アニキ今帰り？」

ロビーに着くと聞き慣れた声が聞こえた

「ああ、臨時で仕事が入ってな」

「ふん」

「とりあえず後二日間一年生四人の世話をするハメになった。」  
「御愁傷様、何でそんなことに？」

…さてどうするかな？

「この前オマエが失敗した課題があるだろ？」

「あんなの出来るわけないだろ！」

「それを無理矢理クリアした馬鹿がいた」

「なっ！？」

おゝ驚いてんな

「しかも、そいつらの担任がマヌケにも話をややこしくしたせいで演習を受けることが出来なくなってな…だから演習内容に近い見回りに連れていく事になった」

「なあアニキ…その馬鹿ってまさか…」

…感付いたようだな

「沈黙は肯定と受けとるけど」

「…とりあえず学園の敷地内での決闘は校則違反だ」

他は知らんがな

## 21話 仕事二日目・前編（前書き）

「世界観」を新たに追加したので良かったら見て下さい。

## 21話 仕事二日目・前編

~~~~~

「アンタ本当に弱いわね。」

「……………」

二人の子供が空地で木剣を持って向かい会っていた。

片方の子供は服装が乱れ肩で息をしている。

対して、もう一人の子供は服装に全く乱れが無く、余裕の表情を浮かべていた。

「何か喋りなよ」

「……………」

少年は答えない

ただ相手に冷えきった眼を向けるばかりだ

「シカトするな！」

カン！

カランコロン…

怒声と共に放たれた一撃によって、少年の木剣が宙を舞い渴いた音をたてて地面に転がった。

「……………」

それでも少年は一言も喋らずに、冷めた眼差しをただ向けるだけだった…

~~~~~

キーン、コーン、カー…………

「じゃあ今日の授業はここまで、準備のできた人から演習場に向かってください。」

その言葉と共に殆どの生徒が《杖》を持って教室を後にした

「ゼノく授業終わったよ。」

マルクは隣の席で爆睡しているルームメイトの肩を揺すった。  
しかしまったく起きる気配が無い。

「二人共、早く行きましょう。」

「でもゼノがまったく起きないんだけど。」

「……………ZZZ……………」

ベタな寝息をたてるゼノ

そこへ…

「仕方ないわね…『水よ』」

「ZZ（バシヤッ！）ブルアアアア！！！」

サラの放った『水汲み』が鼻に入った為、慌てて起きる馬鹿

「おはようゼノ♪」

「：おやすみ」「『水よ』！」：おはようサラ」ビシヨビシヨになった為

自分に『そよ風』を当てて渴かしながら加害者<sup>サラ</sup>に挨拶を返したゼノ

「今日はまた随分深い眠りについてたわね。」

「：誰かさんのお陰で眼がさめたけどなチクシヨウ」

これ以上言うともた水を掛けられそうなのでゼノは席から立ち上がって準備をはじめた

――――

「なあゼノ、昨日あの後何話してたんだい？」

「まあ、色々とな……」

昨日ゼノはヘロヘロになって帰ってきたため、いつも以上に授業中の睡眠が深かったのである。

「今日から本格的に作業をするのよね？」

「詳しい話はあのシグ（マヌケ）に聞いたほうがいいだろうな。」

シグマからマを抜いてマヌケである（ロラン命名）。

そしてゼノが生徒会室の扉に手を掛けたその時――

『納得出来ません！』

中から声が聴こえた。

「な、何今の声？」

『生徒会でもない、それも編入組の一年に神聖な生徒会の仕事をさせるなんて間違ってます！』

『そうですよ！仕事の邪魔になるだけです！』

『考え直して下さい副会長！』

どうやら現生徒会メンバーが今回の件についてかなり反対のようだ。

「…今さらかよ」

ゼノは呆れながら呟いた

ガラガラ…

「失礼します。」

「あら？こんにちは、よく来たわね。」

部屋に入ると副会長は声をかけてきたが――

「「「……………」」」

先程ゴネていたと思われる役員達是不満気な表情を浮かべている

「来たか。じゃあ行くぞ。」

壁に背を預けていたシグマがそう言って歩み寄ってきた。

「待てラゲイル！」

「貴様話を聞いてなかったのか！」

「僕はまだ納得していないぞ！」

するとシグマは――

「生憎だが、貴様らが納得しようがしまいがこの件は決定事項だ。」  
と面倒くさそうに告げて出ていった。

「行くぞ」

「へいへい、それじゃあ失礼しました。」  
ガラガラ…ピシャツ

「で、さっきのガキ共は何なんだ？」  
扉を閉めたら間髪入れずにゼノが聞いた

「アレはプライドだけは高いが大した仕事も出来ない入学組の二年だ。」

「取り敢えず仲が悪いのはわかった。」  
先程の二年達は入学組の生徒で、編入組に対して風当たりの強い奴等である。その為編入組のシグマと仲が悪いのである。

「あのく二人共、中に聴こえてると思うんだけど…」  
というサラの間に馬鹿二人はシレッと

「そりゃあ…わざとだからな」

「常識だろ？」

「…まあいいわ。行きましょう。」

一行はそのまま生徒会室を去って行った

— — — — —

「昨日副会長が言ってた理由ってさっきのか？」  
「ああ。アイツ達は編入組を無能と豪語してる典型的な入学組だからな。その『紅嵐』以外は不要品だと思ってるんだろう。」

そのため副会長は当初の予定を変えて四人をシグマ一人に任せたの



である

「つまり、さっきのは僕達三人が仕事をするのに抗議してたつてことですね？」

「そういう事だ」

「何それ…下らない！」

話を聞いていたサラが憤りの声をあげた。

「入学組が何だっていうのよ！」

「サ、サラちゃん落ち着いて…」

ヒートアップするサラを宥めるナズナ

「何と言うか…入学組らしくない奴だなオマエの幼なじみは…」

「サラは優しいからな…昔から」

ゼノは昔を懐かしむように呟いた。

（これはアイツも苦戦しそうだな…）

一行はそのまま三階の二年生の教室棟に向かった。

一方生徒会室では――

「クソっ！編入組の分際で言いたい放題言いやがって！」

「だいたい何なんださっきの一年は！？年下のくせにガキ扱いしやがって！」

「どうせあの『紅嵐』のお陰で課題をクリアしただけのくせに調子にのりやがって！」

入学組の三人が怒りを顕にしていた

「貴方達、滅多な事を言ってはいけませんよ。」

彼等を宥めるトレア

「しかし副会長！」

「このままで僕達の沽券に関わります！」

「とにかくこの件はここまでです。さあ、貴方達も自分の持ち場にお行きなさい。」

そう言われてしぶしぶと部屋を後にする三人の背中を見ながらトレアはため息を吐いた。

（入学組と編入組の確執はどうか成らないのかしら……？）

――――――

「それじゃあ今日はお前等が中心になって作業をしろ。」  
持ち場に着くなりシグマが告げた

「とにかく落とし物や規則違反者を探せばそれでいい。」

「あの、質問してもよろしいですか？」

ナズナが挙手した

「規則違反とは具体的にどういうのを言うんですか？」

「例えば学園の敷地内での決闘は言うまでもないが、他には食べ歩きや制服の気崩しも規則違反になるな……」

――とそこへ

「よう！お前等何してんだ？」  
何の前触れもなくロランがやって来た。そしてその手には食べかけのパンが握られていた。

それを見たシグマは何処からともなく槍を取り出し――  
「『雷突』！」

槍に雷を纏わせて石突きを思いっきり突き出した。

「危な！！何しやがんだ！？」

「黙れ！何回違反すれば気がすむんだお前は！！」  
槍を振り回すシグマ、逃げ回るロラン

「…何かあの人キャラ変わってない？」

「あいつは普段は敬語も使わないしテンションの低い奴だが、規則に関してだけはかなり厳くてな、目の前で違反をすると――」

「くたばれゴミクズが！」

「危ねえってんだよこの野郎…！」

シグマは容赦無しで攻撃をかましていた。

「あんな感じになる。」

「「……………」」

四人にはビミョーな顔をしながらアクションショーを眺めているしか出来なかった。



## 22話 仕事二日目・中編(前書き)

あけましておめでとうございます！

いつの間にPVが一万に：

これからもよろしくお願いいたします！

## 22話 仕事二日目・中編

~~~~~

北の最果ての森で一人の子供がゴブリンに追いかけていた

『ギャハ！』

『グゲゲ！』

子供一人に対してゴブリンは5匹、とてもその子供には太刀打ちできる相手ではなかった。

（ヤバイ！このままじゃ殺される！！）

つい数分前まで意気揚々とクエストをこなしていた。しかし、運悪くゴブリンの一団に遭遇してしまったのだ。

そもそもゴブリンの討伐難易度はレベル1の前編、つまり魔物の中ではかなり弱い部類に入る。しかし、それはあくまで単体で、複数で行動している場合の難易度は最低でもレベル2まで跳ね上がる。

（はやく、はやく村まで逃げ切らないと！）

ゴブリン自体、冒険者になって日の浅い、彼女には少し厳しい相手であり、それが5匹：戦おうにも勝目が無かった。

元々採取クエストをこなしていたため、既に体力をかなり消耗している。そんな状態では遠くまで逃げれる訳もなく――

ガッ！

「きゃ！」

足がもつれて転んでしまった。
起き上がろうにも足がすくんで上手く起き上がれない。

その間にゴブリンは彼女を取り囲んでしまった。

「あ…ああ…！！」

（ヤバイヤバイヤバイヤバイヤバイ…誰か！）

そしてゴブリンの一匹が手に持った棍棒を振り下ろし――

「誰か！ たすけて…！」

「はいよ」

その瞬間、灰色の影が飛び込んで来てそのゴブリンを吹っ飛ばした。

~~~~~

「さて、少し取り乱してしまっただが作業を開始しようか。」

一頻り暴れ倒したシグマが平然と言い放った。

「あれを少しで済ますのはお前だけだ…っつか生徒会役員のくせに  
暴れやがって。学内での戦闘は校則違反だろうがよ。」

先程まで必死に攻撃を回避していたロランが抗議した。

「生憎だが、役員には必要に応じて校内での戦闘が許可されている。  
さっきみたいな違反者の捕縛もその一つだ。」

「やり過ぎじゃボケ！」

「…ねえゼノ？」

「ん？」

「あの人達ってあんなキャラなの？」

というサラの間にゼノは笑いながら

「いやいや、あんな物じゃ無いよ。…もっと酷いぞ。」

結局その後何故かロランまで見回りに加わる流れになり、6人で行動していた。

「こっちのフロア終わりました。」

「ご苦労だったな……………マグリット!!」

「今忘れてましたね…それからゴミが落ちてたら拾ったほうがいいですか？」

「いやどうでもいい。それは管轄外だ」

「おいシグ！そこでゴミをポイ捨てしてる奴が居るけど？」

「OK！ちょっとシバいて来るわ」

といった会話を交わしながら仕事をする事

約2時間、その間食べ歩き現行犯2人、ポイ捨て現行犯1人、決闘未遂2人の計5人を牢ご…………反省室送りにして二日目の仕事は終了した。

「今日の仕事は完了だ。明日が最後だから気を抜くなよ。それからゼノ、昨日言ったことは覚えてるな？」

解散前のシメでシグマがきりだした

「大丈夫だ、心配はいらない。」



「…ならいい、それじゃあ今日は解散だ。」

それだけ告げるとシグマは足早に何処かに去って行った。

それからゼノ達も寮に向かって歩いて行った

｝side…???

もう少しだ…

俺は静に息を潜めて奴等の様子を窺っていた。

今日こそあの愚者達に裁きを下してやる！

しかしまだダメだ、チャンスを待って確実に仕止めなければ！

『じゃあ俺はこの後寄る所があるから此方に行くわ！』

『何か用事でも有るんですか？』

『シグの奴に昨日ちよっと頼まれたんだ。』

『そっか…じゃあしょうがないわね…また後で』

『僕達は先に寮に帰ってるよ。』

しめた！ターゲットの1人が離れて行った！

先ずはアイツからだ！他の”2人”は後回しでもいいだろう。

ターゲットはどんどん人気の無い裏通りに向かっていているみたいだな

…好都合だ

するとターゲットは突然立ち止まり—

『その”人達”そろそろ出て来たら？』

side out

ゼノが振り返るとそこいらから見知らぬ人達がぞろぞろと出て来た  
全員制服を着ているので学園の生徒だろうとゼノはあたりをつけた

「わざわざ人気の無い所に来てやったんだから理由ぐらい話せよ。」  
ゼノは抑揚の無い声で告げた

するとその内の一人が前に出て来た

「お前達愚者を裁きに来た」

「：言ってる意味がわかんねえな。」

すると別の男が

「貴様らは編入組の分際で『紅嵐』にまとりついているな？それが  
貴様らの罪だ！」

要するにただの言いがかりである

「もう一つ聞くが：何でお前”達”なんだ？」

ゼノの顔からは既に何の感情も窺えない

しかしそれに気付いていない彼等は

「決まってるだろう？」

他の二人も同罪だ！しかし先ずはお前からだ！

「そろそろお喋りは終わりだ：くたばれ愚者よ」

クスクス…

「良かったよ、お前等がただのクズで…」

彼等の前には先程の生徒は既にいなかった――

「安心して潰せるからな…」

そこにいたのは紛れもなく、彼がかつて捨てた『牙折り』だった

## 23話 仕事二日目・後編 『牙折り』

~~~~~

その光景は全てが異常だった――

少年があり得ない速度で地を駆け

腕を振る度にゴブリンの武器を折り、骨を砕き

そして、全てを蹂躪していく

そんな戦いにすら成っていない一方的な暴力を先程までゴブリンに追いかけられていた少女はただただ眺めていることしかできなかった。

「あり得ない……」

少女の口からは自然とそんな言葉が溢れ落ちていた

あり得ない――

ゴブリンと……魔物と”素手”で戦うことが……

あり得ない――

そのスピードと武器をも砕くそのパワーが……

あり得ない――

自分と同じ年齢の少年を相手にゴブリン達が蹂躪されていくのが……

あり得ない……

何よりもその少年が、約2年前に自分が完膚なきまでに打ち負かした相手だったことが：

それから少年がゴブリン五匹を倒すのに時間はかからなかった。

~~~~~

裏町の空き地で複数の相手に囲まれながらもゼノは笑みを浮かべていた。

とても邪悪で不敵な笑みを：

「ほらほら、どうした？ さっさとかかってこいよ二三共。」

今のゼノは昔に戻っていた：

敵対する者に一切の慈悲も与えない――

未だに冒険者の間にその”悪名”を轟かし――

そして何より、他でもない自分自身が忌み嫌い捨て去った、かつての自分に：

「な、何なんだコイツは：？」

「ただの編入組だろ：？ ちょ、調子に乗りやがって！」

「怯むな！ 一斉にかかれ！」

「」「オオーーー！！」「」

入学組の彼等は雄叫びを上げると一斉に呪文を唱え始めた。

遠距離から一息に倒してしまおうという作戦なのだろう、だか――

「おせえ…」

——彼等は相手が悪すぎた。

相手が呪文を唱え始めたと同時にゼノは地面を蹴り駆け出した。その時の反動で石畳が陥没した。

まばたきをする暇もないぐらいの速さで詠唱中の相手に接近し、そして鳩尾に拳を叩き込んだ

「ウゲっ!？」

ドサッ——

くらった生徒はその場で崩れ落ちてそのまま気絶した

「まずは1人」

言いながらゼノはその生徒の《杖》を踏み潰した

「くそっ! くらえ『サンダ…』だから遅えよ」 ぎゃ!」

近くにいた他の相手が魔法を放つ前に《杖》ごと蹴り飛ばして2人目

「バラバラになるな! 前衛は一斉に攻撃! 後衛は攻撃魔法の準備だ!」

リーダーらしき生徒の命令通りに剣を持った3人の生徒が一斉に斬りかかってきた。

ゼノは構えるでもなくただ棒立ちしたままそれらを見据えた

正面の1人が剣を縦に振り下ろした

左右からは残りの2人が腰を狙って突きを放ってきた

瞬間、ゼノは先ず正面の相手の振り下ろした剣を側面から弾くことで右に受け流した

『ガキン!』

「「なっ!!」」

それによって弾かれた正面からの剣撃が右からの突きとぶつかり合っ  
てそれを遮った。

次にゼノは残った左からの突きを、身を捻ることでもかわしてそのまま刀身を横からへし折り、回し蹴りであいての顎を蹴った。  
蹴られた相手は勿論気絶した。

「攻撃が大振りすぎだ、隙だらけだぞ。」

「黙れ!!」

「調子に乗るな!『ウッズステイング』」

残りの2人の前衛の内、1人は剣を横風ぎに振って、もう1人は発  
動時間が短い初級魔法の『木杭』を飛ばしてきた

ゼノはバックステップで剣をかわして、飛んできた杭を片手で掴んだ。そしてそこから前に踏み込みながら掴んだ杭の側面を剣を振り切った相手の頭に振り下ろした

「これで4人」

やはり相手を気絶させたあとに剣をへし折った

「今だ下がれ！」

残りの1人が後ろに飛び退くと同時に後衛4人の魔法が一斉に飛んできた

氷弾が、風の刃が、雷の槍が、そしてリーダーらしき男が放った巨大な炎の玉がたった1人に向かって飛んできた

自分に襲いかかってくる攻撃を眺めながらゼノは何かを呟いた

「『――』発動……」

ズドーン……！！

魔法が炸裂して辺りが煙に包まれる

「どうだ、これなら効いただろう！？」

「いや、冷静に考えたらヤバいんじゃないか！？」

「さすがにやり過ぎたって！」

「死んでないよな？」

先程までとは違う不安に包まれる彼等。最初から痛めつける気はあれど殺す気など微塵も無かったのだ。しかしあまりの恐怖にっいたり過ぎてしまった。

「心配は無用だ……」

だが、彼等の心配は杞憂に終わった

煙の中から平然とした声が聞こえたからだ

「「「はぁ！？？」」「」」」



複数の魔法を受けたはずのゼノはほぼ無傷で爆心地に突っ立っていた。より正確に言えば両手に少しの火傷を負っただけだった。

「で、まさか今のが全力じゃないよな？」

ゼノからは余裕が感じられた

入学組の5人は信じられないものを見ていた。そしてそれに恐怖した。

――――

その名前は数年前、北に行った冒険者から国中の冒険者やギルドに広がった

その者は武器を持たない

その者は魔法が使えない

素手で魔物を仕止め

武器を砕き

魔法を振じ伏せ

そして誇りを踏みにじる

敵対した相手のありとあらゆる”牙”を破壊し尽くす悪党

その名は――『牙折り』

――――

「さてと、そろそろ終わりにしようか。」

そして5人にトドメをさそうと『牙折り』は歩み寄る

彼等の”牙”は既に折れていた。誰一人その場を動く事ができなかった。

そして――

「そこまでだ！」

その場に割り込んだ人物達により、それは防がれた

「打ち合わせと違うことしやがって…… とういうつもりだ大馬鹿<sup>ゼノ</sup>」

「それ以上戦う必要は無いだろう」

そこに現れたのは『爪』と『角』だった

「邪魔をするな、そいつらは――」

「お前の友達を傷付けるつもりだった、だろ？だがもうそんな気は起こさないだろう。」

チラリと彼等を見ると恐怖のあまり震えていた

「おいオメエら！」

「は、はい！」

ロランに声をかけられて慌てて返事をするリーダーらしき男

「オメエら1年だな？何でこんなバカな事したんだ？」

「そ、それは……」

「お前達、正直に話したほうが身のためだぞ。」

なかなか喋ろうとしない相手にシグマが追い討ちをかける

「コイツをこれ以上怒らせたくないだろ？」

「わかりました…」

――――

「事情はわかった。お前等はもう帰れ。」

「わかりました。」

襲撃してきた生徒達とはとぼとぼ帰って行った

「…で、その大馬鹿は何で先走ったんだ？昨日の打合せではお前は囷になるだけで戦うのは俺達の役目だったはずだ。」

ロランが咎めるような口調でゼノに問いかけた

実は前々からゼノは悪目立ちしていたため入学組から目をつけられていたのだが、この前の課題によって更に敵視されるようになったのだった。そして昨日シグマの説教が終わった後、ゼノはいつ襲われてもおかしくない状態であることを告げられていた。

そこで今回、ゼノを尾行している奴がいたらシグマが捕まえるという打合せだったのだがゼノの独断で破綻した

「…アイツ等があまりにも理不尽な理由で俺だけじゃなくマルクとナズナにまで手を出そうとそたから…」

「だからって『牙折り』に戻ることないだろうが。」

「それは…」

俯いて黙るゼノ

そこへ今度はロランが言葉を投げ掛けた

「いいかゼノ？ お前の友人として、それから『トライオーガ』のリーダーとして言わせてもらうぞ……二度と『牙折り』に戻るな。お前はもう昔と違うだろう？」

「…善処するよ」

こうしてこの日は終了した

寮に戻ってもゼノの顔には笑顔は戻らなかった。

## 24話 仕事最終日

side..ゼノ

~~~~~

「ハハハ：スゴい！コレ、俺がやったのか！？」

——やめろ！

「ほらほらどうした！？子供相手にその程度か？」

——やめろ！！

「その魔法はもう見飽きたよ： 他にもっと無いの？」

ーやめろ！！！！

「あんたの”牙”も折らせてもらうよ。」

~~~~~

「やめろーーーー！！！」

……夢か

ここは寮の部屋？

今のはやっぱり夢か：昔の夢：

「ちっ：最悪な気分だ」

嫌な夢を見た：昔の無邪気で残酷で、能力を得て振り回して：周り  
の人達をメチャクチャにしまった：俺自身の夢を

「そーいや今何時だ：？」

部屋を見回してもマルクの姿は見当たらない。代わりに机の上に書き置きがあった

『ゼノへ

起こしてもまったく起きる気配が無かったから先に行くよ。ちなみに僕は遅刻ギリギリまで粘ったからね。

マルクより』

……OK！状況を整理してみようか。

マルクは遅刻ギリギリに寮を出発、俺が起きたら既に部屋には誰も居ないと。

俺は嫌な汗を体中に感じながら時計を見た：

9..07

：寮から学園まで約40分、授業開始は9時

「遅刻だーーーー！！」

俺は急いで支度を始めた。

一一一一一一一一

現在位置 東地区のゲート  
ちょうどゲートが起動しやがった…あと30分足止め決定

「何か学園に行くのダルくなってきたな…」

どうしようかな、一応生徒会の仕事を手伝っている立場だしな

「よし、サボろう!!」  
一日ぐらい大丈夫だろ!

「そうと決まればさっそく何処に行くか考えるか。」  
どうしようかな?ギルドに行って久しぶりにまともなクエストでも受けるかな。

「うん、そうしよう。」  
まあ、どちらにせよここで30分足止めなんだけだな…

— — — — —

な、なぜだ!  
どうしてこうなった!

「何故だー！ー！？」

「五月蠅いわよ！」

隣にいるマオ先生に拳骨をくらった

とりあえず状況を整理すると、

「あの後ゲート起動の直前に同じく寝坊したマオ先生がやって来てその場で鉢合わせ」

「そしてワタシが無理矢理学園まで引っ張ってきたら遅刻ということとで二人して指導室に連行されたってわけ」

「おいコラ、なにコラボレーション決めこんでんだ。」

俺達のありがたい説明を聞かせてやったのに目の前の規則馬鹿は、喉元に槍を突きつけてきた

「てか生徒会の手伝い期間中にサボりとはいいい度胸だ。」

「いや違うんすよシグマさん。俺のはただの寝坊なんすよ。」

実際にサボったわけではない！

未遂だからセーフのはずだ！

「あとその教師、貴様の遅刻理由は何だ？」

相変わらず敬語を使わないシグマの問いかけに対して先生は

「違うのよ！ただワタシは昨日の仕事の疲れが溜まってただけなのよ！」

「ちなみに先程あんたの同僚からきいたが昨日は定時で帰ったらしいな」

「……………」

先生は顔を背けて黙る

「まあ、貴様等へのペナルティーは後日通達する。だからもう教室



に行け」

「「分かりやした!!」」

俺達は直ぐに指導室の外に出た

ガラガラ…ボタン—

「まったく! 陰険クソ眼鏡め!」

「もう、本当に腹が立つわ!」

「どうしやすかアネゴ? 一杯ひっかけに行きやすか?」

「よしさっそく行くわよ!」

ガラガラ…

「さっさと行けグズ共!」

「「ハイッ!!」」

今度こそ俺達は教室に向かった

〃 side out 〃

— — — — —

〃 数時間後・昼休み 〃

いつもどおり四人で集まってご飯を食べているゼノ達。ちなみにサラとナズナは一緒に弁当を作ってるから同じ中身のためマルクと三人で弁当のオカズをよく交換したり、いつもおにぎりしか持って来ないゼノに分けたりしている。

(おかしい…)

「ねえ、ゼノ？」

「ん？」

「何かわたし達に隠してる事ない？」

サラが突然切り出した。

「何でそう思う？」

「何ていうか… そうね、違和感がある…かな？」

「ハハハ… 考え過ぎだよ。」

「そんじゃ俺はちよつとトイレに行ってくる。」

「そういつてゼノは教室から出ていった。」

「一体どうしたのサラちゃん？」

「だって明らかに変よ！」

「そうかな？ 昨日寮に帰ってきた時は確かに変だったけど…」

ゼノの様子がおかしいと言うサラと違って、いまいちピンとこない二人

「いつもと違って無理矢理笑顔を作ってる感じがするのよ。」

(小さい頃にも見たことがある… 何かを堪えてる時の不自然な

笑顔…)

— — — — —

くそして放課後く

「さて、今日も集まってもらったわけだが…」

いつもどおり生徒会室に集まった四人にシグマは告げた

「今日の仕事は二手に別れて行う。」

まず、俺とゼノが外回りだ。そんで残り三人はここに残って副会長の手伝いだ。」

「ちょっと待ってください。なせ二手に別れる必要があるんですか？」

すかさず疑問を口にするサラ

「質問は一切受けつけん。以上だ、行くぞ。」

「へいへい…」

「待ってゼノ！」

「心配すんな。直ぐに終るさ。」

サラに呼びかけられたがゼノは軽く流して出て行ってしまった。

生徒会室を出た二人は軽く辺りを見回した後、校門に向かって歩いてそのまま学外へ出ていった。

「おい、シグ」

「何だ？」

「今日中に終わらせるぞ…」

《杖》を構えながらシグマは答えた――

「当然だ」

そしてそれを合図に二人は後方に駆け出した。

「!!っー」

「なに!?!」

そこには二人を尾行していた生徒がいた

「『エレキボウ』」

「がつ!!」

不意を突かれたため追跡者はシグマが放った雷の矢に反応が出来ずに貫かれた。

くらった相手はそのまま気絶した。

「よくも!『我を守れ大地の加護よ! ロックアーマー!』」

相棒がやられたことでもう一人は冷静さを取り戻した。

「潰れてしまえ!!」

追跡者は身体中に強固な岩を纏って巨大になった拳をシグマに向かって振り下ろした。

そこへー

「隙だらけだよ」

ゼノが追跡者の脇腹に飛び蹴りをかました

飛び蹴りをくらった追跡者は体制を少しだけ崩して、拳の軌道がシグマから逸れた

「ごさかしいな、編入組の一年! しかしその程度の攻撃などこの岩の鎧の前では無力だ!」

今度はゼノに向かって岩の拳が飛んできた

ゼノは最小限の動きでそれをかわして懷に潜り込んだ

「だったら見せてやるよ！俺の切り札を！」

ゼノの右手がぼんやりと発光した。

「『魔闘術』発動……」

ゼノはそのまま岩の上から相手の胸に向かって掌底をくりだした

「くらえ…… 鬼人流格闘術・波の型『衝波』」

ゼノの掌がクリーンヒットした

相手は地面に膝をつきながら吐いた

「ゲホッ！！ な……何故あの程……度の……掌底で……ゲホッ」

「悪いが企業秘密だ……」

――――

この光景を物影に隠れて窺っている者が一人いた

「何者なんだあの一年！？ただの編入組じゃないのか！？」

そこに背後から誰かが忍びよって、首筋に剣をあてた

「全然ちげえよ。」

「っ！？」

「おっと、動くなよ。」

そこにいたのはロランだった

「おーい、シグー！こっちにも居たぞ！」

「でかした純粹馬鹿<sup>ロラン</sup>、これで全員だ。」

――――

Side…サンドラ

えーと、とりあえず状況が把握できないから整理してみようかしら…

「質問なんだけど…何でその人達を拘束してるのかしら？」

わたし達が生徒会室で書類整理を手伝っていたら先程出ていったゼノ達が戻ってきた……お土産付きで…

わたしの隣にいる二人も訳が分からないようで、終始頭に疑問符を浮かべている。わたしの隣にいる二人も訳が分からないようで、終始頭に疑問符を浮かべている。

「あの、確認したいんですけど…その人達って生徒会の方達ですよね？」

その通り、だからこそわたし達はよけいに意味がわからない

「残念ですね…まさか本当だったなんて…」

副会長のトレアさんが肩を落とした

どうやらこの人は事情を知っているようだ。

「副会長、いったいどういうことなんでしょうか？」

「それは自分が説明しよう。」

シグマさんが口を開いた。

わたし達はみな顔を向けた。

「オマエ等も既に知っていると思うが昨日こいつ（ゼノ）が襲われた件が関係している。」

「ハイ、ストーップ！一旦止めて!!」

今とんでもない事いわなかった!?

「ば、お前それは言うなっていったる…」

ゼノの反応を見る限りどうやら本当の事らしい。  
ついでにわざと隠してたらしい。

「ちょっとゼノ! ということなのよ!!」

「わざわざ話す必要無いと思ったんだよ…」

「そこ、後にしろ。」

それでその時の襲撃者を捕らえて事情聴取したところ――

シグマさんは拘束されている三人を指差した

「コイツらにそそのかされたらしい。」

「「「なっ!?!」」」

何よそれ…

「それで先程わざと襲われやすい場所を歩いていたら三人そろって  
尾行してきたから拘束した、というわけだ。」

わたし達は三人に目を向けた。向こうは苦い顔をしながら顔をそむ  
けた

「そんじゃあそろそろ動機を話してもらおうか。といってもだいた  
い想像はつくけどな。」

ロランさんが三人を問い詰める……というかあなたは生徒会の人じ  
やないでしよう…

「最初に言っておくが…今更無実を主張しても遅いからな。仮に俺  
達が学外に行ったのを不信に思ったのだとしても本来なら尾行なん

てせずにその場で問い詰めるのがマニュアルだからな。」

シグマさんは証言の前に三人の逃げ道を潰したようだ

それから三人が事情を話したけどその理由が――

「要するにあんた等は俺が編入組のくせに調子こいてるのが気に入らなかったから襲わせたっつーことか？」

そんな下らない理由だった。

それを聞いた副会長は残念そうに彼等に告げた。

「今まで口酸っぱく言ってきたつもりでしたが……生徒達を先導する立場である以上、入学組と編入組に分け隔てなく接しろ、と

残念ながらあなた方には伝わらなかったようですね。」

「「……………」」

三人は黙りこんだ

「あなた方にはペナルティーを与えます。また、今後同じ事をした場合は生徒会を除籍していただきます。」

三人はしぶしぶ頷いた

「それでは今度はあなた達四人についてですが……本日の仕事は終了とします。この件は他言無用です。いいですね？」

そういわれたのでわたし達は生徒会室を出ていった。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8444y/>

---

～碎牙～

2012年1月10日13時56分発行